平成24年度

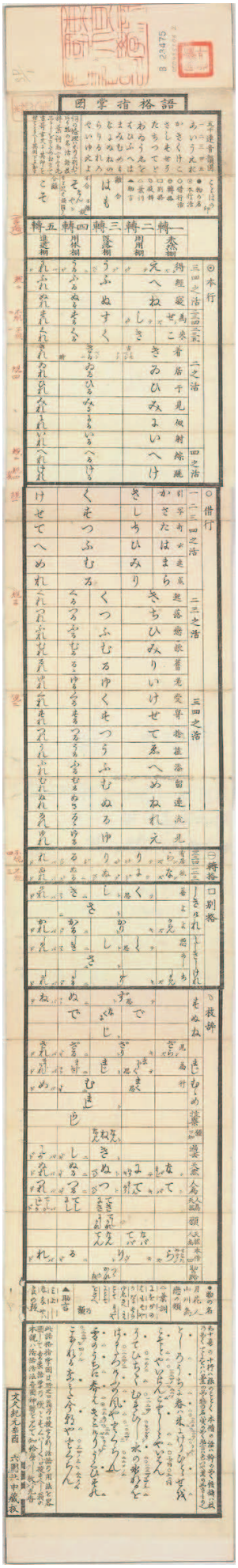
東京大学附属図書館特別展示

展示資料目録

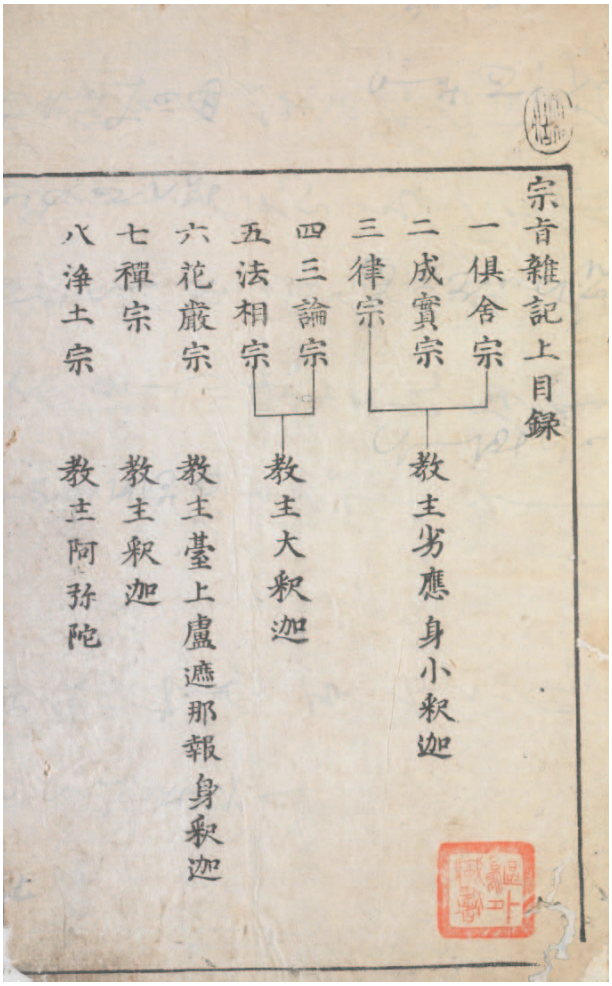
鷗外の書斎から

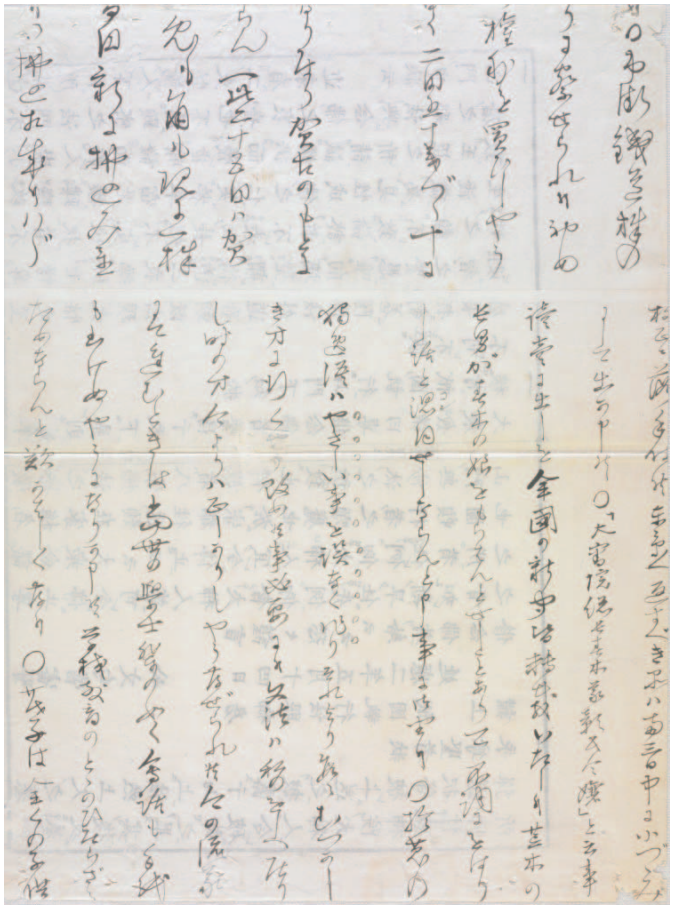
―生誕150年記念　森鷗外旧蔵書展―

（肖像写真は文京区所蔵）

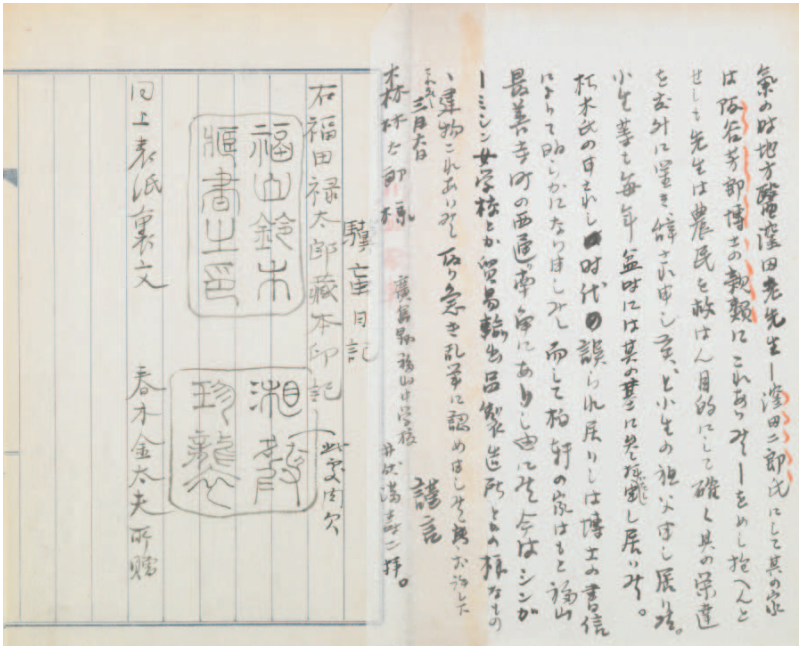


2－1　語格指掌圖



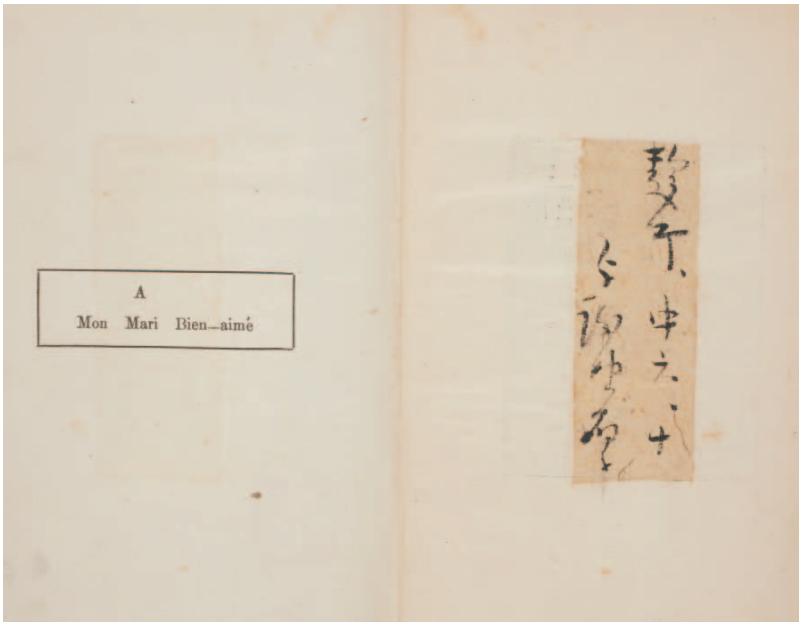


2－2　宗旨雜記(表・裏)

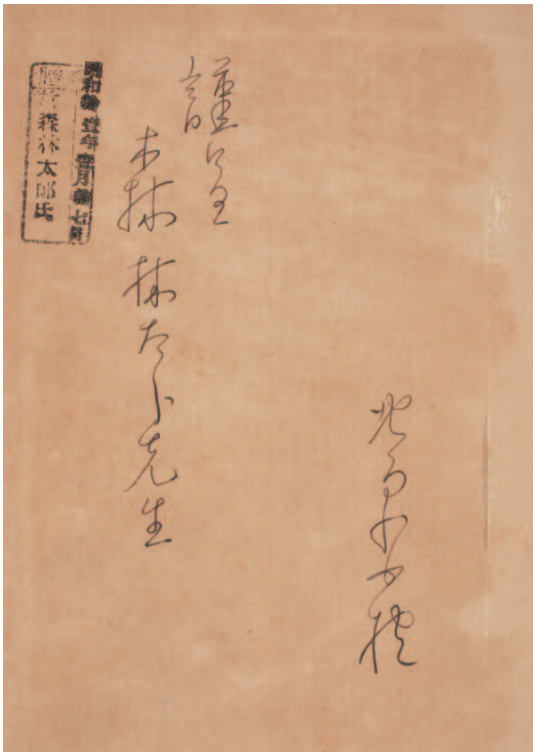


２－３　菅頼系諸家事蹟

２－７　一握の砂



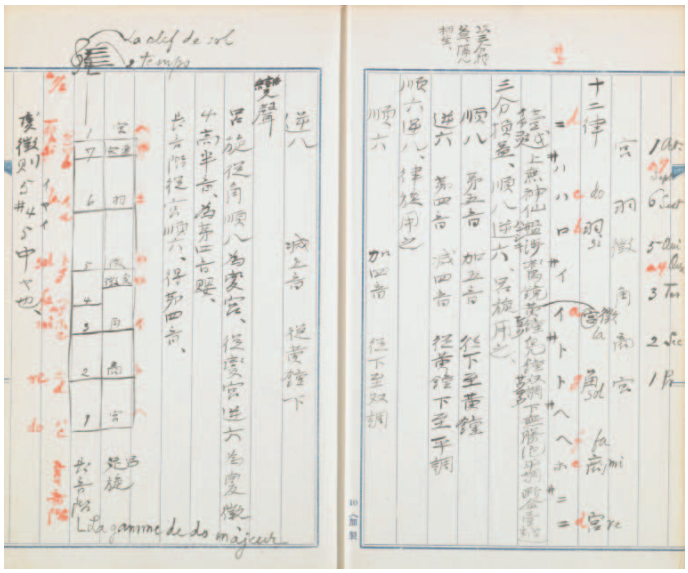
２－８　青海波



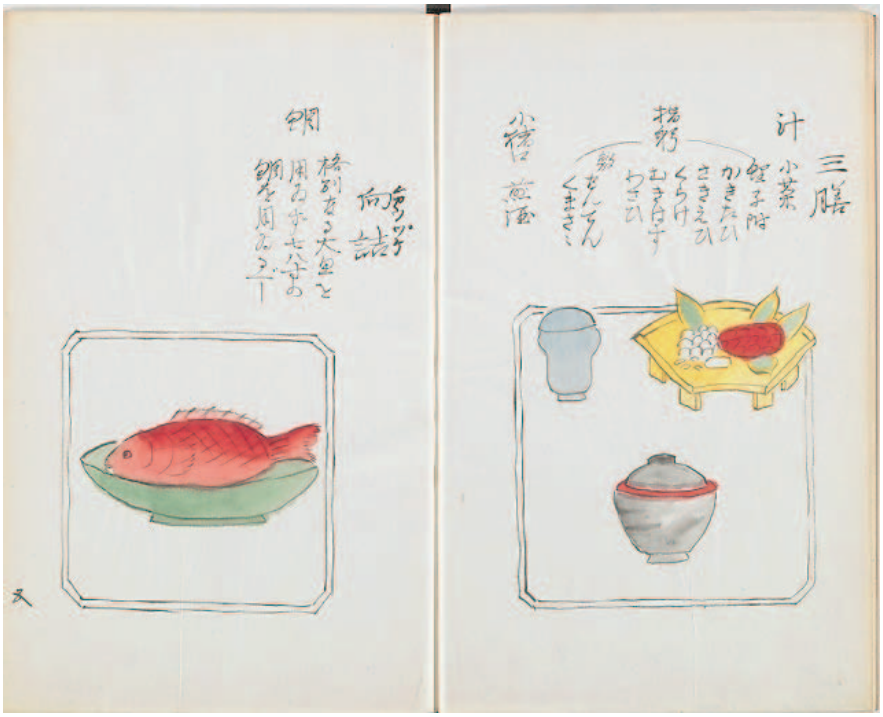
２－９　雲母集：歌集

3－6　長禄江戸圖

3－3　陸氏草木鳥獸蟲魚疏圖解

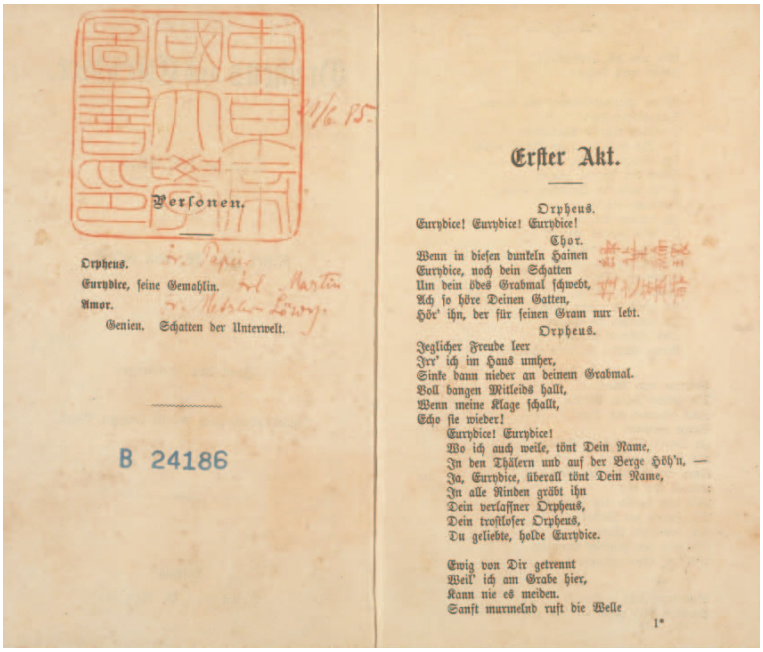


3－9　樂小記



3 －11　膳部之事

4 － 9　武鑑　文化十二年



4 －24－ 1　Orpheus und Eurydice : Oper in drei Akten

ごあいさつ

東京大学附属図書館では、毎年、全学で所蔵する貴重な資料を学内外の皆様にご覧いただくため特別展示を行っています。

平成24年(2012)は森鷗外の生誕150周年に当たりますので、今年度は、総合図書館で所蔵している鷗外の旧蔵書、鷗外文庫から厳選した資料を展示いたします。鷗外が愛蔵した資料を通して、明治の文豪の書斎を想像しながら鷗外の知識の源流に当たるものを味わっていただけるよう企画いたしました。

鷗外文庫は、千冊を超える武鑑(大名や旗本の姓名・出自・職務・石高等を掲載した名鑑)や江戸古地図をはじめ、和・漢・洋の幅広い分野にわたり、総計は19,000冊に上ります。今回の展示では、「若き鷗外」「家族と友人」「知識の沃野」「作品の原点」の4つのコーナーを用意し、鷗外が読書をしながら書入れをした蔵書や自筆本のほか、蔵書の裏貼りに用いられた母親への手紙など、約70点をご紹介いたします。

東京大学総合図書館は、大正12年(1923)の関東大震災で図書館の全焼、資料の焼失という甚大な被害を受けました。その後、ロックフェラー Jr. の寄付による図書館の再建に加え、国内外から数多くの資料の寄贈をいただきました。今回展示いたします鷗外文庫も、大正15年(1926)1月に森鷗外の遺族から寄贈されたコレクションです。ところが当時の図書館の整理方針に基づき、長らく各分野の書架にばらばらに収められていたため、資料の別置と書入れ状況の悉皆調査が行われて全貌が明らかになったのはつい最近のことです。その成果とも言える、鷗外文庫書入本画像データベースが公開されておりますので、そちらも併せてご覧いただければ幸いです。

このたびの展示開催にあたり、鷗外文庫書入本画像データベースの調査でご尽力いただいた東海大学文学部出口智之講師のご寄稿ならびにご指導をいただき、展示期間中にはご講演を賜ることとなりました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成24年10月

東京大学附属図書館長
古　田　元　夫

目　次

ごあいさつ …… 1

鷗外文庫について …… 5

展示資料解説
　若き鷗外 …… 9

　家族と友人…… 19

　知識の沃野 …… 27

　作品の原点 …… 35

参考文献 …… 53

展示資料一覧 …… 55

展示資料解説　凡例

＊コーナー番号－コーナー内通番
＊書名（ふりがな）
＊著者
＊出版地　出版者　刊年［西暦］
＊総合図書館請求記号は巻末の展示資料リストに掲載

資料解説の多くは、鷗外文庫書入本画像データベースの解題を基に作成されており、各解説の執筆者は、以下のとおり。
＊解説末尾の（姓）は解説執筆者（巻末執筆者一覧に掲載）
＊解説末尾に（姓）の記載のないものは展示委員による
＊解説末尾に（姓、一部改編）とあるものは、書入本画像データベースの解説に、今回の展示に合わせて展示委員が手を加えたものであり、文責は展示委員会にある。
本来の解説の全文は画像データベースを参照されたい。
http://rarebook.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/ogai/index.html

鷗外文庫について

東海大学文学部講師
出　口　智　之

東京大学総合図書館に森鷗外の旧蔵書、いわゆる鷗外文庫が収められているのは、こと研究者や愛好家にとっては、比較的よく知られたことだろうと思う。だが、資料の保存・研究とならんで展示公開にも重きを置く文学館や記念館とは違って、大学図書館は学内者の利用に供することを第一の目的とするものだから、一般の方々にもその存在を広く知っていただき、さらには実際にご覧になって鷗外への親しみを深めてもらう機会が限られてしまうのは、どうしてもやむをえないことである。しかるに、このたび鷗外の生誕百五十周年を記念した特別展が行われ、貴重な書籍の数々が展示されるはこびとなったのは、心から嬉しいことと思う。周知のことばかりで恐縮だが、ご覧になられる方々に少しでも興を添えていただければと、ここに鷗外文庫と今回の展示のあらましを簡単に申上げておきたい。

大正11年７月に森鷗外が他界したあと、観潮楼と呼ばれる千駄木の鷗外邸と、房州日在の別荘とに分蔵されていた蔵書が、当時の東京帝国大学に寄贈されたのは、大正15年のことであった。それより以前、大正12年の関東大震災による火災で数十万冊におよぶ蔵書を失った図書館には、紀州徳川侯爵家の徳川頼倫から譲られた南葵文庫をはじめ、内外より多数の書物が寄贈されていたが、鷗外の遺蔵書もまた、図書館復興のために遺族の手から贈られたのであった。鷗外の長女、茉莉の夫で、寄贈にあたって直接の労を執った仏文学者の山田珠樹によれば、鷗外自身は長男の於菟と山田、そして親交のあった漢学者の吉田増蔵に蔵書を分け与えるよう遺言したとのことだが、蔵書の分散を惜しんだ山田が一括しての寄贈を提案したらしい。ただし、そのころ編纂中だった全集の資料として、与謝野鉄幹の手もとに移っていた著作や自作掲載雑誌等、遺児たちが用いていた辞書類、また鷗外生前の約束で義妹に贈られた明治文学関係の書物だけは、寄贈から除かれたとのことである(「鷗外文庫寄贈顚末」、『小展望』、六興商会出版部、昭和17年12月)。

かかる遺族の厚意によって、鷗外の旧蔵書は大部分が当館に架蔵されることになったわけだが、しかしながら当時の図書館は、寄贈書をそれぞれまとめて管理するのではなく、館内の分類基準に従って整理する方針を取っていた。そのため、鷗外旧蔵書も中村不折筆の「鷗外蔵書」という印が押されたのみで、各分類の書架へとばらばらに収められたのである。しかも、『鷗外文庫目録』「和漢書之部」「洋書之部」という二冊の冊子目録こそ残されてはいたが、「非常に簡略な情報を示すのみで、書誌情報も所在情報も十全とは言い難かった」(江川和子「鷗外文庫書入本データベースの公開について」、『文学』平成19年３月)。すなわち、鷗外文庫は名前こそ存在するものの、その全貌はきわめてつかみにくい状況にあったわけである。

もちろん、これまでにも学内外の研究者や図書館関係者によって、何度か調査は行われてきた。しかしながら、このように基礎的情報に不備があったこともあり、いずれも文庫の全容を明らかにし、さらには小堀桂一郎が「鷗外の蔵書がそのまま「研究資料」であるという所以は(中略)その蔵書中への書き込みにある」(「鷗外文庫のこと」、『比較文学研究』昭和42年４月)とする、自筆の書入れを総体的に調査するにはいたらなかった。そこで当館は、平成17・18年に日本学術振興会科学研究費補助金(研究成果公開促進費、課題番号178049・188017)の交付を受けて、資料の別置と書入れ状況の悉皆調査、書誌目録データベースの作成、および書入本画像データベースの作

成を開始した。先に示した江川和子の文章は、その中間報告にあたるものであるが、このプロジェクトは同補助金の交付が終了したあとも、附属図書館および当時の情報基盤センター図書館電子化部門の協力によって継続され、平成21年度をもって完了した。

五年にわたるこのプロジェクトでは、総合図書館書庫内に架蔵・保管されている書籍をほぼ網羅的に調査し、寄贈時に押された「鷗外蔵書」の朱印の有無によって、鷗外旧蔵書の特定を試みた。しばしば誤解されるので、ここにあらためて記しておくが、この印は寄贈者を示す図書館側の資料となるもので、鷗外自身が用いた蔵書印ではない。プロジェクトチームはこの印記を手がかりに、冊子目録に漏れていた書籍まで可能なかぎり拾い集めたうえで、全点、全ページを視認し、書入れの有無を調査票に記録した。鷗外筆とは認めがたい書入れについても、あえて「極力現状を記録することに努めた」のは、江川の記すとおりである。

さらに、この調査の結果から重要と判断された書入れおよび自筆本については、ウェブ上で閲覧できる画像データベースを作成した。和書212点、洋書57点の合計269点を掲載するこのデータベースには、書誌情報とともに解題が附されており、一部は今回の展示にも利用されている。スペースの都合で展示できなかった資料や、あるいは参考文献を含むより詳細な解題が示されているので、ぜひご覧いただきたい。(URL＝http://rarebook.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/ogai/index.html)

鷗外文庫の正確な全貌は、このプロジェクトによってはじめて明らかになったと言えるだろう。およそ一万九千冊にもおよぶその蔵書中には、儒学・中国文学などの漢籍や仏書から、江戸明治期の文芸作品、歴史小説・史伝に用いられた資料を含む史書、厖大な武鑑と江戸期の地図、軍事・医学関係書、そしてドイツ語を中心とする洋書にいたるまで、きわめて幅広い分野の書物を見ることができる。そのなかには、従来紹介されたことのない史伝関係の資料も見つかったし、生涯にわたって作成された自筆ノート類が相当数含まれていたのも驚きであった。とりわけ、書中に施された無数の書入れからは、鷗外が作品を鑑賞し、知識を身につけ、自身の文学へと昇華させてゆく過程をまざまざとうかがうことができた。

今回の展示では、この成果を受けて、鷗外文庫のすがたをこれまでとは異なる新しい切口で紹介することを試みた。

まず「若き鷗外」のコーナーでは、おおむねドイツ留学からの帰国(明治21年)以前に作成された自筆ノートや、読書時の書入れを紹介した。文壇デビュー以前の足跡を物語る貴重な資料が多く、特に医学生や軍人としての横顔が垣間見られるのが興味深い。

続いて「家族と友人」のコーナーには、親しい人々との交流をうかがわせる資料を集めた。『宗旨雑記』の裏貼りに用いられた、明治32年から35年までの小倉時代に東京の母に宛てて送られた手紙からは、家族に寄せる鷗外の愛情が伝わってくる。また、夏目漱石や幸田露伴の作品を雑誌から切抜き、丁寧に製本してある特徴的な数冊には、同時代の作家たちに対する意識をうかがうことができる。

「知識の沃野」のコーナーでは、知の巨人、鷗外の広汎な読書歴が実感できるように、なるべく多彩で、かつ従来あまり知られていなかった資料を選んだ。歴史、仏教、医学といった周知の分野だけにとどまらず、法律や漢字、音楽、礼法、織物など、多方面に広がるその興味には驚かされるばかりである。

そして「作品の原点」のコーナーでは、主として歴史小説や史伝に活用された資料、また訳詩集『於母影』などの翻訳に用いられた原本を紹介した。『渋江抽斎』執筆のきっかけとなった、

抽斎の蔵書印が押された『武鑑』も、作品の背景を物語る資料として貴重である。

鷗外文庫の最大の特徴は、単に鷗外の作品を考えるうえでの資料を提供してくれるのみならず、人間鷗外の実像と、その知の歩みとを鮮やかに甦らせてくれるところにある。多くの書籍が揃いの柿色表紙と自筆題簽とを附して改装され、しかも上部を化粧裁ちする際、書入れ部分だけを丁寧に切り残してあるあたりには、いかにも几帳面な彼の性格があらわれているし、また少なからぬ全丁自筆の写本からは、書物にかける熱意がうかがわれるだろう。現在、書庫の片隅にまとめて別置されている鷗外文庫のなかには、まぎれもなく鷗外その人がたたずんでおり、わたくしたちはその書物に触れることで、彼の息づかいや思いを感じ取ることができるのである。今回展示できた資料は、文庫全体からすればあまりにもわずかだが、そうした鷗外文庫の魅力に少しでも触れていただければ幸いである。

1 若き鷗外

このコーナーでは、ドイツ留学を終え、明治の文壇で華々しく活躍する以前の森林太郎に関する資料を取り上げる。この時期の鷗外については他の時期と同様、鷗外自身の手になる各種日記、作品等をはじめ、研究者等による多くの研究があり、詳細を知ることができる。ここでは年譜的に森林太郎の軌跡を辿ることにする。

鷗外森林太郎は、文久２年(1862)１月19日(新暦２月17日)父森静泰(明治以降は静男)、母峰子の長男として石見国津和野に生まれた。鷗外の生年については、第一大学区医学校(後の東京大学医学部)の規則で入学年齢(14歳から17歳)に達していなかったため２歳上乗せして万延元年(1860)生まれとしたことはよく知られている。また鷗外は、終生津和野に帰ることはなかったが、「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」と遺言したことは有名である。

鷗外は、幼少の頃より漢学を学び、明治２年(1869)に入った津和野藩藩黌養老館では毎学年優等者として、賞品(書物)を授与されるほどの成績をおさめた。

明治３年(1870)には、漢学を学ぶと同時に蘭方医学を学んだ父静男から『和蘭文典』でオランダ語を習い始め、以後も継続して学んだ。

明治５年(1872)、父静男と共に上京し、藩主亀井氏別邸のある向島小梅村に落ち着く。10月にはドイツ語を学ぶため神田小川町にあった親戚西周宅に一時寄寓し、本郷壱岐坂にあった私塾進文学社に入学し、明治６年(1873)に退学するまで通った。

明治７年(1874)、12歳で第一大学区医学校に入学し、明治14年(1881)、東京大学医学部を最年少で卒業した。医学を学ぶかたわら、父静男の患者だった縁で依田学海に入門し、正式に漢文を学んだのは学生時代のことである。鷗外の旧蔵書にはたくさんの漢文で書かれた書き込みがあり、展示資料１－９『経国美談』のように漢詩が書かれているもの、展示資料１－１『安政箇勞痢流行記』の識語のように複雑で長文の漢文が書かれているものなどがみられ、見事な腕前であることがわかる。

卒業後、ドイツ留学を望むがかなわず、家庭の事情から陸軍に入り、軍医となった鷗外だが、陸軍から衛生学を修めるため念願のドイツ留学を命ぜられ、明治17年(1884)８月横浜港からドイツに向け、出航した。明治21年に帰国するまでの４年間をライプチヒ、ドレスデン、ミュンヘン、ベルリンで過ごし、当時第一線で活躍していたホフマン、ペッテンコーフェル、コッホから最新の衛生学を学ぶ一方、洋書の収集と読書にも励んだ。展示資料１－16『Martin Luther's Leben』は、見返しに「1886年３月23日ミュンヘン」とメモ書きのある資料である。日付から推定するとミュンヘン到着後２週間足らずのうちに購入されたことがわかる。蔵書中には、他にも日付をメモ書きされた資料が残されており、留学中、盛んに洋書の収集を行っていたことがわかる。

また鷗外文庫に残された蔵書印や署名から鷗外は生涯にわたり多くの号を名乗ったことがわかっている。最も有名な「鷗外」号は、『ドイツ短篇集』に残された書き入れからドイツ留学中に初めて用いられたものと考えられている。それ以前は、展示資料１－２、１－５－１、１－12に見られる「牽舟居士」などいくつかの号を名乗ったことが知られている。蔵書印は、現在鷗外記念館が所蔵するものだけで16種類あり、時期によって異なる蔵書印が使われており、本展示においても初期の頃から後期まで様々な蔵書印を見ることができる。鷗外文庫の蔵書に残されたこれらの署名や蔵書印を辿ることで鷗外が蔵書を収集したり、読書したりした時期を推定することができる。

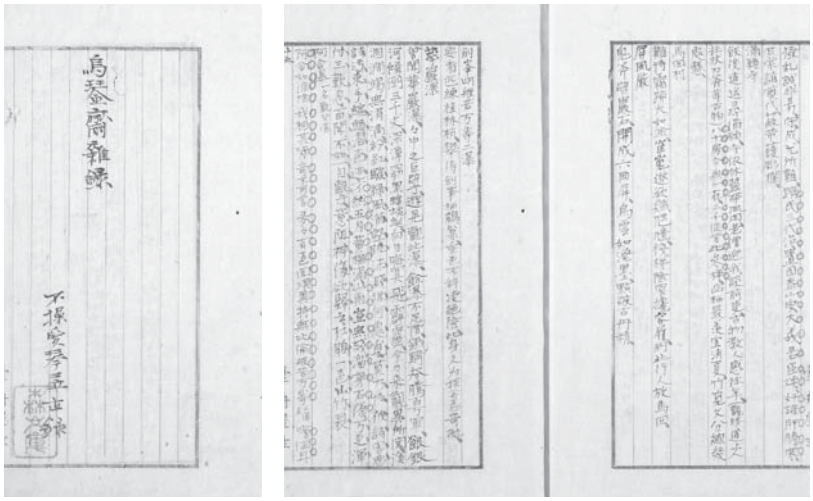
１－１　安政箇勞痢流行記（あんせいころりりゅうこうき）

金屯道人［著］［江戸］　天壽堂　安政 5.9［1858］［刊］　１冊

安政のコレラ流行の際に、民間で数多く発行された啓蒙的な養生書のうちの代表的なものである。『転寝の夢』（幕末に西洋医学の伝習を行ったポムペ・ファン・メールドルフォールトによるコレラの対策法を記した本）をそのまま収録している。巻末に「安政虎列刺之行其事多不伝今僅獲此一書可以少考矣明治十二年牽舟居士」という書入れがあり、鷗外による入手が医学部本科２年時であったこと、明治10年代、既に入手困難な本であったことがわかる。論文『Beriberi und Cholera in Japan』（日本における脚気とコレラ）内で、当時江戸で刊行されていたパンフレットとして、注に挙げられている。本資料に押された「參木之舍（みきのや）」印は鷗外が若い頃に使用していた号である。また「橘井堂」は、父静男が千住に開業した医院の名前でそこで使用していた印を蔵書印として使ったと思われる。（山田、一部改編）

１－２　烏琴齋雜録（うきんさいざつろく）

不操愛琴居士録著　［森鷗外自筆］　１冊



鷗外による自筆写本。冒頭に「不操愛琴居士録」とあり、明治大正期の漢詩人大江敬香（愛琴）の作成したノートを写したものと思われる。初期の頃に使用されていた牽舟居士の原稿用紙に書かれており、鷗外が大学を卒業する前後に書かれたものではないかと考えられる。内容は前半が漢籍、歌書、仏書などからの抄録であり、『後漢書』、『頼豪』、『荘子』、『世事百談』などの書名が見られる。後半は、向山黄村著『游晃小草』、『祖父詠歌』、『こころのさる』などからの抄録であり、赤字で批点圏点が書き込まれている。

なお、原稿用紙に印刷された「牽舟居士」の名の由来は、鷗外が住んでいた向島小梅村曳舟通りに由来する。（神田、一部改編）

１－３　小説神髄（しょうせつしんずい）

坪内逍遙　［東京］［東京稗史出版社］　1885.3 緒言　２冊

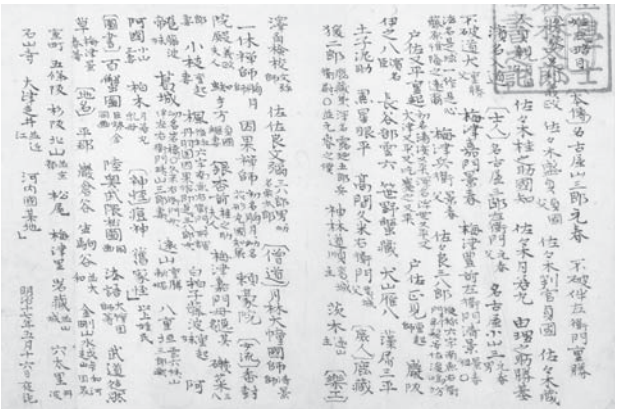
坪内逍遙による文芸理論書。その論旨に対しては、今日まで様々な評価がなされているものの、小説の近代的意味と機能を論じたという点で、日本の小説史にとって記念碑的な評論であることは間違いない。鷗外の書入れは帰朝後、すなわち明治21年（1888）以降のものであろう。有名な一節である「小説の主脳は人情なり、世態風俗これに次ぐ」の部分に、かぎ括弧で印が付されているほか、本文中には、「Fabel」「Drama」「Roman」「Tragödie」など、主としてドイツ語による20箇所の赤色鉛筆の書入れが上巻を中心にある。

鷗外は、明治22年（1889）に、自身はじめての本格的な文学論文「小説論」（『読売新聞』明治22年１月３日掲載。全集22巻には「医学の説より出でたる小説論」として収められている。）を発表しているが、それも、この『小説神髄』を念頭において書かれたとされている。ただ、ゴットシャルの影響を受けた鷗外の「小説論」は、科学と文学の弁別を説くものであり、心理学に引きつけながら、小説の価値を主張しようとする『小説神髄』とは、一線を画するものであった。（神田）

１－４　昔話稲妻表紙５巻（むかしがたりいなずまびょうし）

山東京傳編　歌川豊國繪　浪華　三木佐助　８冊

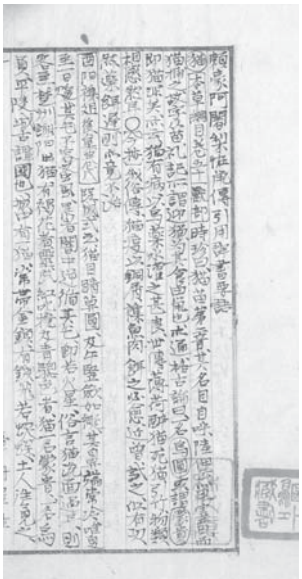
江戸後期の戯作者山東京伝の読本における代表作。初版は文化３年（1806）だが、水野稔氏によれば、鷗外蔵のものは、明治刷。初冊巻頭に、鷗外の筆で「姓氏略目」を書いた和紙が折り込みで貼付されている。この「姓氏略目」には、「人名」以外にも、「図書」、「地名」なども含んだ固有名詞一覧が含まれている。「明治十七年五月十六日夜記」との書入れがあり、留学直前期、23歳での読書であったことが分かる。



なおこの資料に押印された「医学士森林太郎図書之記」印は、鷗外が大学卒業後に使用したもので鷗外の蔵書中に残された蔵書印の中でも「森氏蔵書」、「森文庫」に次いで多く使用されている。（小谷、一部改編）

１－５－１　頼豪阿闍梨怪鼠傳引用群書要語（らいごうあじゃりかいそでんいんようぐんしょようご）

［森鷗外自筆］　１冊



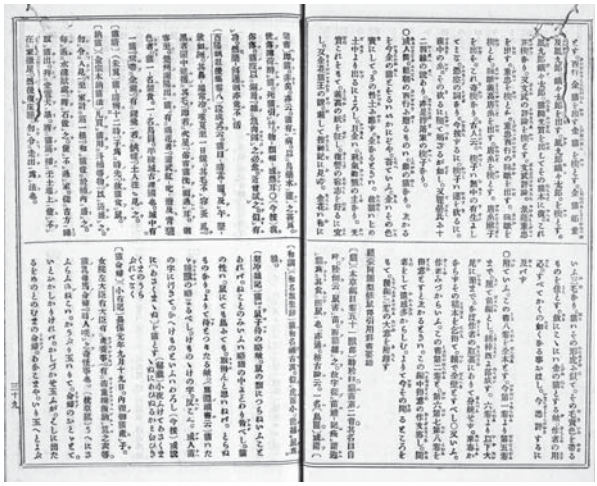
滝沢馬琴の読本『頼豪阿闍梨怪鼠伝』の各巻末につけられた猫と鼠に関する様々な用語を集めた同名の用語集を書き写したものだが、鷗外文庫に収められた同書（１－５－２）の記述内容と一部が異なる。またこの写本の最後には、「牽舟居士追録」として鷗外自身が資料から抜き書きしたものも収められている。題簽は「猫鼠集纂」。写本に使われた原稿用紙は、初期の頃に使われた牽舟居士の原稿用紙である。（神田、一部改編）

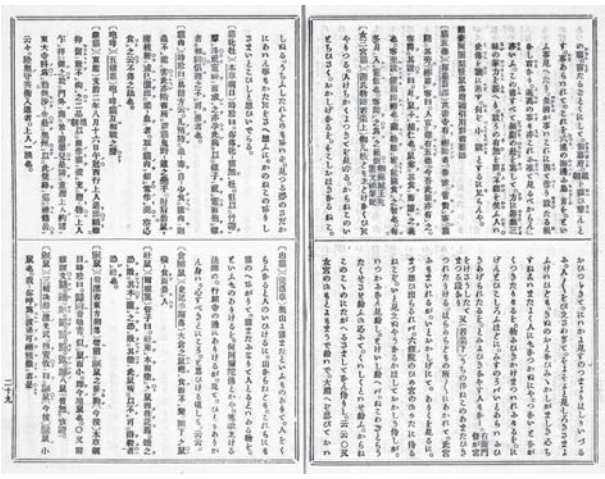
１－５－２　頼豪阿闍梨怪鼠傳（らいごうあじゃりかいそでん）

滝沢馬琴著　月岡芳年画　［東京］　滑稽堂　２冊

この物語は、木曽義仲の子清水義高が頼豪から鼠使いの妖術を授けられ、父の敵である源頼朝を狙い、義仲に死に追いやられた猫間中納言の弟光実が義高を狙うという内容である。

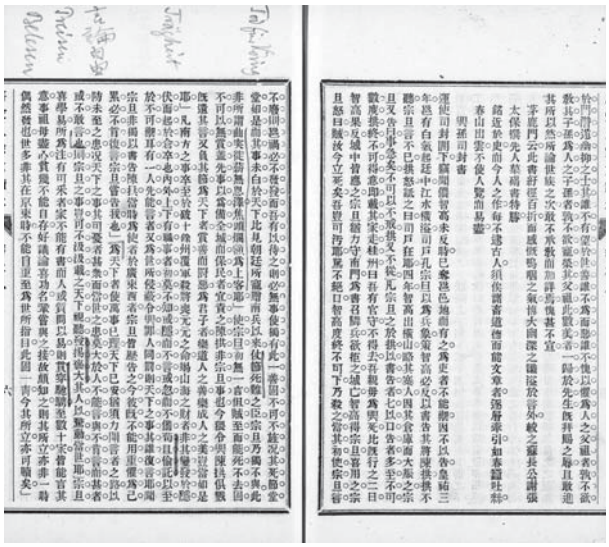
この本は、奥付が切り取られているため出版年を確認することはできないが、明治になって（おそらく明治16年頃）出版されたもので、オリジナルは文化５年戊辰（1808）に前編５巻、後編３巻で刊行された。オリジナルの挿図の作者は葛飾北斎であるが、鷗外文庫に収蔵されていない。（神田、一部改編）





１－６　唐宋八家文読本（とうそうはっかぶんとくほん）

（清）沈徳潛評點　東京　磯部屋太郎兵衛　1879.9　８冊



明代の学者茅坤が編纂し、清代乾隆年間の詩人沈徳潛が選輯し評点を付した漢文集。唐の韓愈、柳宗元、宋の欧陽脩、蘇洵、蘇軾、蘇轍、曾鞏、王安石ら古文家８人の文を収録する。近世後期から明治期にかけてのわが国において、漢文学習者の手本として流布した。多数のドイツ語による注記がなされているほか、「富兵論」（巻五、蘇洵「韓枢密に上る書」に対する書入れ）、「言論自由」（巻八、曾鞏「孫司封に与ふる書」に対する書入れ）など、当時の社会問題に関係する言葉も記されている。（合山）

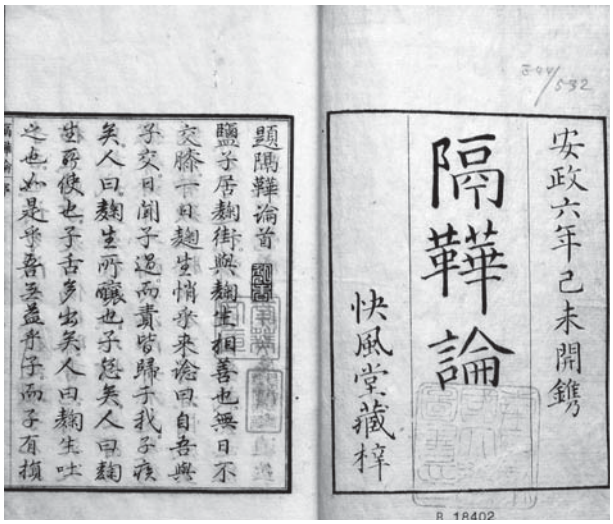
１－７－１　隔靴論（かっかろん）

鹽谷世弘著　［森鷗外自筆］［1880.4］　１冊

松崎慊堂の弟子であり、水野忠邦の家臣であった幕末の碩儒塩谷宕陰（世弘）の著書を鷗外が筆写したもの。初期に使われた牽舟居士の原稿用紙を使用しており、また末尾に「庚辰四月牽舟居士森林太郎書」とあるので、明治13年（1880）、鷗外19歳の時の書写と分かる。「論澳門居夷」、「同窟狐狸」、「論聖祖貽謀」、「論宣宗黜林則徐」、「論琦伊放俘」、「論清十敗」、「甘島犬」、「悪嶽狒」、「論耶教攻心」、「福神盗」、「論夷進漢学」の11章からなる。（神田）

１－７－２　【参考資料】隔韡論（かっかろん）

鹽谷世弘著　［江戸］　快風堂　安政６［1859］

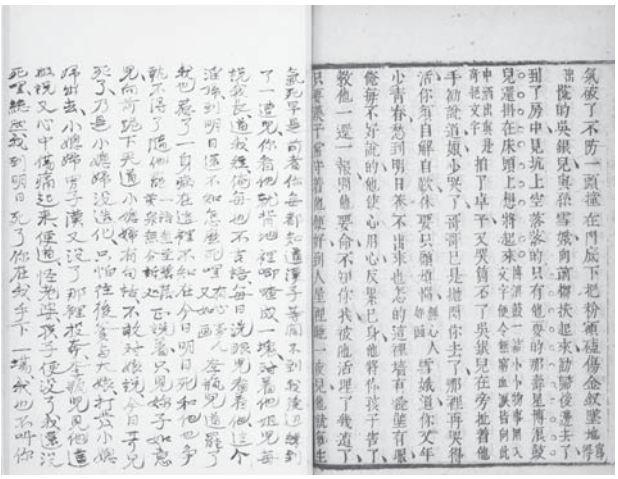


鹽谷世弘（宕陰）は、江戸時代後期の儒者。宕陰は号。文化６年（1809）愛宕山下に生まれた。ヨーロッパ諸国との交流から中国でアヘン戦争がおこったのに危機感を覚え、海防策の必要性を説く著作を多く著した。名文家としても知られる。

この資料は、鷗外旧蔵のものではないが、参考資料として展示する。旧蔵者の島田篁村は、鹽谷世弘の弟子にあたり、幕末から明治時代にかけて活躍した漢学者で明治14年（1881）東京大学教授となった人物である。なお、この資料は南葵文庫旧蔵書である。

１－８　皐鶴堂批評第一奇書金瓶梅100回坿讀法（こうかくどうひひょうだいいちきしょきんぺいばい）

著者不明・李笠翁批点　康熙４［1695］［刊］　20冊

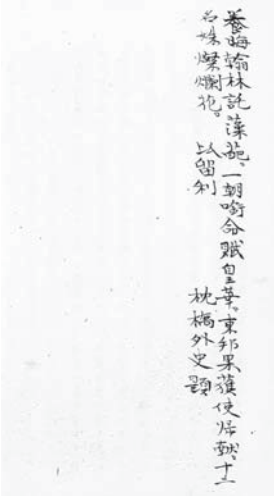


著者不明・李笠翁批点『金瓶梅』は明代の長編白話小説で、中国四大奇書の一。日本でも、馬琴『新編金瓶梅』など、近世期から様々なかたちで翻案されてきた。

本書は、鷗外若年時の愛読書であった。鷗外『雁』には、書生の「僕」が神田で「唐本の金瓶梅」を購入する場面があり、『キタ・セクスアリス』にも、文淵先生（モデルは依田学海）の机の下から、同書が覗く場面がある。書入れは墨筆、朱筆、青筆。第五十九回の欠落部分は、墨筆で全て補っている。ゴットシャルの小説論と李笠翁の論を対比する箇所など、小説観が窺える書入れも多い。『情史類略』、『石点頭』、『西青散記』といった、比較的短い説話集への書入れとは別に、長篇小説の読み方が窺える、貴重な資料である。（多田）

１－９　經國美談：齋武名士（けいこくびだん：せーべめいし）

矢野文雄纂譯補述　東京　報知新聞社　東京　丸善書籍店（賣捌）　1883.1－1884.2　４冊



明治期のジャーナリスト矢野竜渓（1851－1931）の政治小説。古代ギリシャのテーベの史実をかりて、自由民権論を主張したもの。鷗外は、物語の場面を描いた挿絵の裏および正史摘節の末尾に、合計６首の作中人物を題材にした七言絶句を書き込んでいる。６首すべてが、スパルタの専制政治を擁する奸党を打倒し、テーベの独立を果たそうとする正党の志士たちを扱っており、鷗外が作中で是とされている主要人物たちに感情移入していたことがうかがえる。漢詩の制作年代は不明だが、「医学士森林太郎図書之記」の印を使用していることから、この本が出版された明治16年からドイツに旅立つ明治17年８月の間に記入されたものと思われる。なおオリジナルは前編（明治16年）、後編（明治17年）の２冊で出版されたが本資料は鷗外の手によって４分冊に製本しなおされ、それぞれに外題が書かれている。（神田、一部改編）

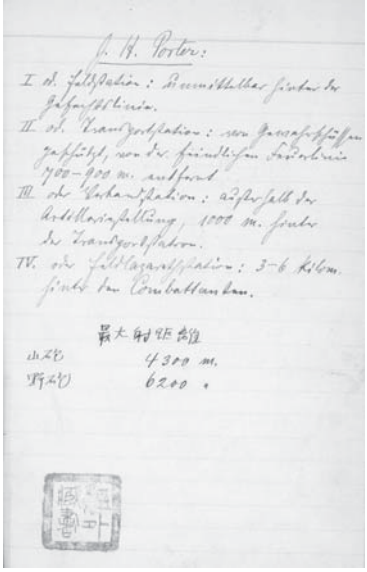
１－10　　大倭本草（やまとほんぞう）

貝原篤信編録　皇都［京都］　永田調兵衛　寶暦11［1761］　９冊

貝原益軒著。江戸時代における日本人による最初の本格的本草書。本来本草書は、薬物学について書かれたものであるが、本書は、薬物学としての本草書というより、博物誌というべきものになっている。「森文庫」の印記と「森林太郎」および「東京大学医学部」の後識語があり、医学生時代に入手したものと考えられる。「ウド」の項には「「ウド」の實ヲ水中ニ撒スレバ蝦集ル然レトモ其蝦ヲ食フ者、或ハ腹痛或下痢スト越人ノ話ナリ」（巻５：37丁オ）という興味深い書入れがある。「落花生」の項には「明治十二三年ノ頃ハ此菓ヲ嗜ム者多ク南京豆ト称テ東京ノ町々ヲ鬻アリキ又店ヲ開キテ売ルモアリ処々ニ植テ之ヲ作レリ」というような、後年のものと思われる回顧的な書入れも見られる。鷗外は比較的長期にわたって本書を事典的に活用し、折りにふれて雑多なメモを書入れていったものと推測される。（梅山、一部改編）

１－11　軍事雑記（ぐんじざっき）

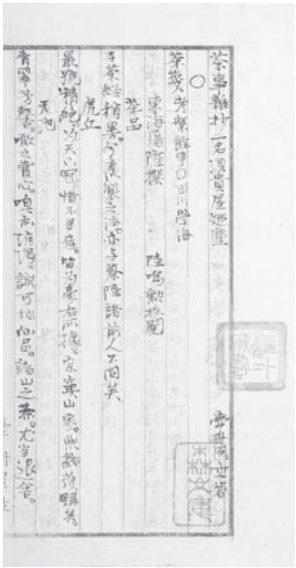
［森鷗外自筆］　１冊



見返しにはマーブル紙が用いられ、表紙には箔押しの装飾が施された横罫のノートに、ペンで記されている。内容はすべて軍務に関係する情報で、軍隊の所在地表、尺貫法からグラム・メートル法への換算表、日清戦争の死傷者数、摂氏から華氏への換算表などが含まれている。ドイツ語のほか鷗外にしては珍しいフランス語での記入もみられる。“inden chinesischen Wirren1900”（＝義和団の乱）等のメモがあるところから、この年代ごろには使用されていたといえよう。末尾には「野戦衛生勤務連繫ノ大要」など数枚の図表が貼り付けられている。（渋谷、一部改編）

１－12　茶事雑抄　一名すきやの塵（ちゃじざっしょう　いちめいすきやのちり）

牽舟居士著　［＝森鷗外］　１冊



さまざまな書物から、茶に関する箇所を書き写した雑記帳である。これと同様のものに、１－７－１『隔靴論』があるが、それと同じく柱に「牽舟居士」と印刷された用紙を用い、細筆で小さな字がびっしり書き込まれており、鷗外の几帳面な性格がよくあらわれているといえる。書写の対象となったのは、茶の湯のことだけではない。蘇軾の漢詩から、医学や生理学的な内容のもの、「コヘイネ」（＝カフェイン）や咖啡（＝珈琲）という語もみられる。また一部には、「明治十三年五月十一日　牽舟老衲撰録」と記された「茶史」（19ウ～21ウ）など、鷗外自身の文章も含まれている。巻頭の書名には「牽舟医士著」とあり、また用いられた用紙から、鷗外がこの号を用いていた明治10年代前半にまとめられたものと推定できる。（出口、一部改編）

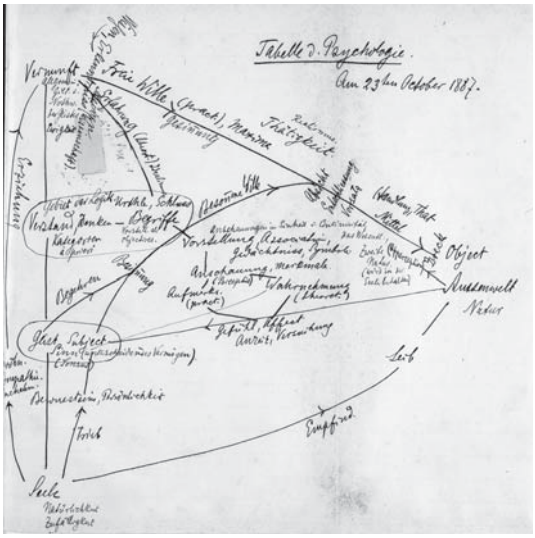
1 ―13　Vorarbeiten zu einer zukünftigen Wasser-Versorgung der Stadt Berlin

L. A. Veitmeyer　Berlin Reimer1 1871 2v.

『ベルリンにおける将来の給水計画』。産業革命や人口増加の影響により、19世紀中ごろのベルリンではコレラやチフスなどの疫病がはびこるようになるほど衛生状態が悪化していった。このため1850年代には上水道、1870年代から下水道網の整備が始まった。コッホ(コレラ菌や結核菌の発見で1905年ノーベル賞を受賞)が所長を務めるベルリン大学付属衛生学研究所で学んでいた鷗外は、上下水処理関係施設を訪れている。この資料は、鷗外がベルリンに滞在した頃(1887－1888)よりも少し前の資料であるが、大判のベルリンの地図が含まれており、鷗外が下宿していた場所やベルリン大学など鷗外ゆかりの地も確認できる。

1 ―14　Geschichte der Philosophie im Umriß : ein Leitfaden zur Übersicht

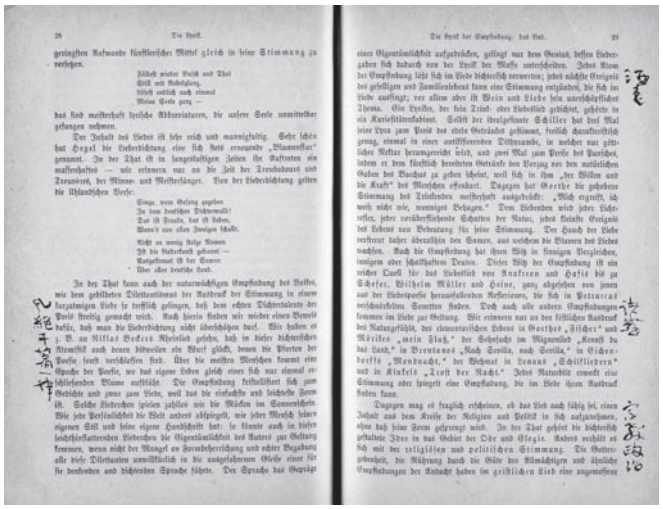
Albert Schwegler　Stuttgart C. Conradi 1887 14. Aufl. / durchgesehen und ergänzt von R. Koeber 1v.



シュヴェーグラー『西洋哲学史』。鷗外の書き込みは1887年のドイツ留学中(黒インク)と帰国後(朱筆)とに時期がわかれ、新プラトン学派などの章における朱筆の日本語書き込みには没理想論争の中で逍遥を「Idealist」と捉えた見方が表れている。対して留学中の書き込みは全てドイツ語か漢文であり、その夥しい量とともに西洋認識論に寄せられた関心の質がうかがえる。同時に「荘云」として荘子の言を引いたものや、神的なものと人間的なものの合一という観点に対して「所謂覚是也」といった註がある事も興味ぶかい。鷗外の認識論は漢文で著された仏教哲理のそれに親しいものがあり、その意味で本書の書き込みは鷗外文庫書入本画像データベースに収録している『唯識抄』(３－１参照)『華厳五教章』(鴎A00：6511)などへの書き込みと対比されつつ読まれる必要があるだろう。(多田、一部改編)

1 ―15　Poetik : die Dichtkunst und ihre Technik, vom Standpunkte der Neuzeit

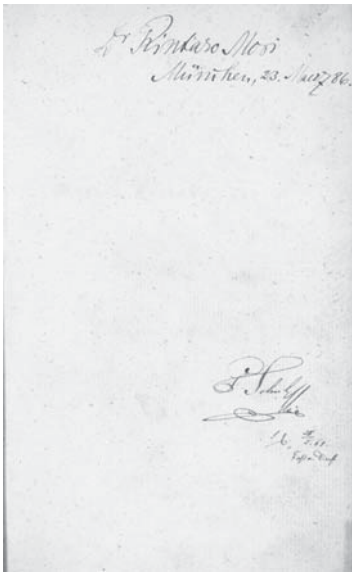
Rudolf von Gottschall　Breslau E. Trewendt 1882　5. durchgesehene und verb. Aufl.　2v. in1



ルドルフ・フォン・ゴットシャル『詩学～近代的視点から見た文芸とその技法～』。ゴットシャルはドイツの作家・劇作家。戯曲・小説・詩などの創作に加え、文芸批評など幅広い分野で多くの著作を残した。鷗外がゴットシャルを精読していたのはミュンヘン時代からベルリン時代にかけてと推定されている。「詩学」の理論書であり、その内容は文芸の原理的な考察、修辞学、ジャンル論(文芸を「抒情詩」、「叙事詩」(散文文芸を含む)、「演劇」に分類)に及ぶ。鷗外帰国後の初期文芸評論「現代諸家の小説論を読む」「明治二十二年批評家の詩眼」における小説の分類や、「『文学ト自然』ヲ読ム」における立論の依拠文献であり、鷗外の当時の小説観に大きな影響を及ぼした書物だといえる。また、修辞学の箇所では暗喩の実例として「花之白雪」「国家之柱石」と日本語の例を挙げたり、文芸の種類に下線を引いたりと、本書を教科書のようにして使った様子が浮かび上がる。(河野、一部改編)

1 ―16　Martin Luther's Leben

Gustav Pfizer　Stuttgart　S. G. Liesching 1836　1v.



グスタフ・ファイザー著『マルティン・ルターの生涯』。扉のメモから鷗外は1886年3月23日ミュンヘンで購入したと推定される。鷗外は人名や日付に下線を引き、歴史・宗教についての内容メモを書入れている他、「描叙英雄気象、文有生色」、「若読水滸伝」など、ファイザーの生彩あふれる人物描写の文体に触れたコメントも含まれている。鷗外はドイツ留学中に西洋史の歴史書・伝記等を多く読んでいたが、その読み方を知る上で貴重な資料である。(河野)

2 家族と友人

鷗外は自らの思想や作品をめぐって周囲の作家や学者らと論争が絶えなかったが、家族や友人らには愛情をもって温かく接していたことが、鷗外の手元にあった資料からも窺い知れる。

例えば家族に関する資料としては、鷗外にとってたいへん大きな存在であった母・峰子からの書簡が残されている。

鷗外は慶応4年(1868)に津和野藩の儒学者・米原綱善から四書の素読を学んだ。そのとき、鷗外の学習の手助けをしようとした峰子は字が読めなかったにも関わらず「かくれて曾祖母(峰子の母)に乞い『いろは』から習い始めやがて仮名つきの四書を読み得るように」なった。また「再三熟読暗誦林太郎の復習を監督した。そしてその寝につくのを待って終日の家事に疲れた身で、夜更けまで暗い灯火の下で翌日の分を予習した」(『父親としての鷗外』p.103－104)とされる。

鷗外が東京を離れ小倉へ一人で赴任していた間は、峰子から「みそ、しょうゆ、のり、つけもの、そして肌着から普段着まで、頻繁に輸送され」(『鷗外をめぐる女たち』p.215)、鷗外と峰子の間でやり取りされた書簡は『宗旨雑記』の裏打ちに用いられた。

鷗外は家族以外の人々とも非常に幅広く付き合い、年下の文学者たちとも交流があった。明治40年(1907)頃、短歌雑誌『明星』と『アララギ』が思想の違いから対立していたが、40代半ばの鷗外は「明星」派と「アララギ」派の若手歌人たちを同時に自宅に招き、以後数年にわたって観潮楼歌会を催した。

鷗外自身も短歌をよく詠んだが、短歌界に自らの派閥を作ることをしなかった。その一方で後輩たちからの相談事には協力を惜しまず、相手に対して細かく気を配り、「極めてオオプンな、誰に対しても城府を撤して奥底もなく打解ける半面をも持っていた(中略)…若い人が常に眷(なつ)いて集まった(後略)」(『新編思い出す人々』p.338)と評された。鷗外文庫に収められた献呈本は、その大半が「明星」「アララギ」両派の新進作家たちから寄せらせたものである。

鷗外の細かい気の配り方は「極めて神経質で、学徳をも人格をも類するに足らない些事でも決して看過しなかった」(『森鷗外』p.274)と言われたほどであるが、その几帳面な性格は彼の蔵書にも現れている。

「蔵書は父の最も大切にしたものである。父の生活は一刻も手から書巻を離したことがないと言えよう」(『父親としての森鷗外』p.274)とあるとおり蔵書は丁寧に扱われ、古くなった書物には裏打ちなどの修復が行われている。

また、気になる雑誌の記事や自身に送られた手紙を用いて自ら造本を行ったと思われるものも存在する。その造本技術は確かなもので、100年以上を経た現在もほとんど崩れが見られない。

２－１　語格指掌圖（ごかくししょうず）

牧村光香［著］　文久元［1861］［刊］　１帖

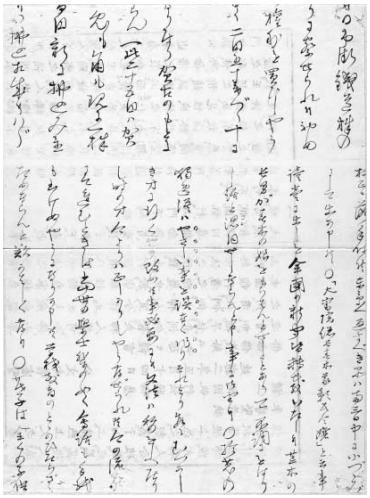
津和野藩の藩士であった牧村光香が文久元年（1861）に記した、語格をまとめた図である。

鷗外も津和野藩出身であることから、幼少時の鷗外はこの図を用いて語学の学習を行ったとされる。

図の裏打ちに用いられた紙には幼少時の鷗外と鷗外の弟である篤次郎（三木竹二・劇評家、医師）により、北海道の地名に混ざり「四歳　森林太郎」「森篤次郎三歳」と記されている。（多田、一部改編）

２－２　宗旨雑記（しゅうしざっき）

日乾［著］　洛陽　栗山宇兵衛　天和 2.7［1682］［刊］　２冊



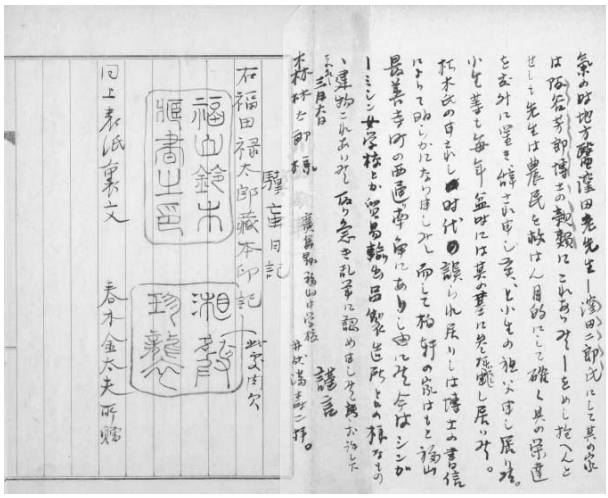
この資料は日蓮宗の僧・日乾が記したものであるが、綴じられた紙の裏側には鷗外が小倉赴任中に記した母・峰子への書簡の断片が裏打ちされている。

森鷗外は明治32年（1899）から明治35年（1902）に軍医部長として小倉で勤務していた。その間、東京に残した母・峰子と書簡をやり取りしていたとされ、柳生四郎「小倉時代の森鷗外未発表書簡」により母親宛の書簡が『宗旨雑記』の裏に貼られていたことが明らかになった。

書簡は『宗旨雑記』の綴じ順とは関係なく裏打ちされ『宗旨雑記』の大きさに合わせて切断されているため完全な復元は不可能であるが、現存する書簡の翻刻はすべて終了している。また、書簡は「鷗外文庫書入本画像データベース」で公開されている。

２－３　菅頼系諸家事蹟（かんらいけいしょかじせき）

１冊



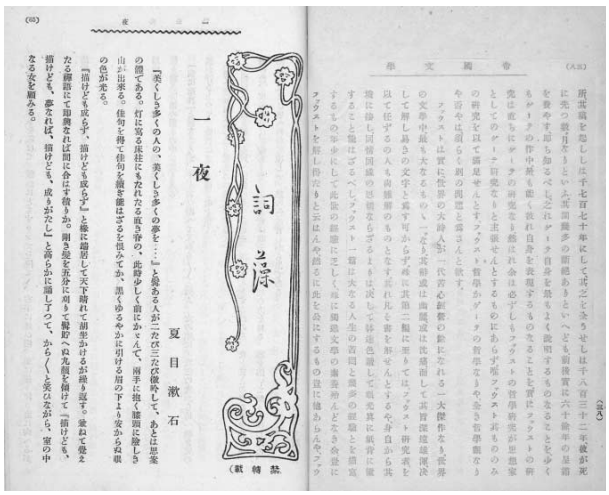
伊沢蘭軒（江戸時代末期の医師・儒学者）や北条霞亭（江戸時代の漢学者）に関する資料を鷗外自身がまとめたものである。

この資料で特筆すべきは、当時、旧制中学に通学していた井伏鱒二が鷗外に記した手紙が綴じられている点である。「森鷗外氏に詫びる件」（朝日新聞1931年７月15・16日朝刊）に「私が森鷗外氏をだまして、その結果、森鷗外が新聞小説の一回分を余計に書いたことについて話さう」との書き出しで、井伏鱒二自身がこの手紙を送った経緯を記している。

井伏鱒二は鷗外に２回手紙を送っており、１回目は偽名「朽木三助」、２回目は本名を用いて実在しない朽木三助の死について記した。なお、鷗外は２回目に送られた手紙を綴じ込んだ。

２－４　幻影の盾（まぼろしのたて）・倫敦塔・一夜・カーライル博物館・二百十日

夏目漱石著　１冊



『ホトトギス』８巻７号の付録として刊行された『幻影の盾』、『帝国文学』（明治38年１月号）に掲載された『倫敦塔』など５つの短編が掲載誌から切り取られ綴じられている。

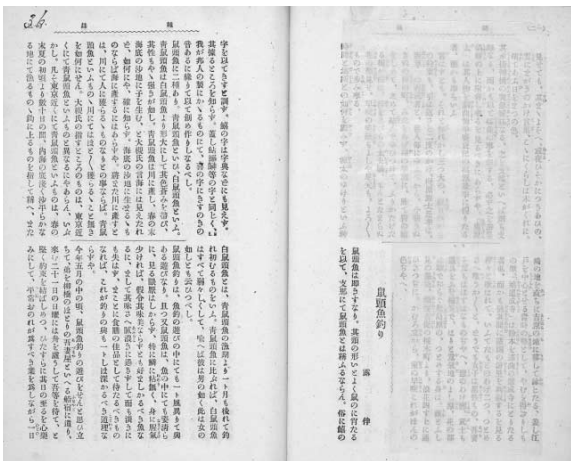
造本の特徴として、漱石の作品に関係ない箇所は半紙が糊付けされ隠されている点が挙げられる。また、造本は鷗外の手によって行われたと推定される。

鷗外は漱石に対し好意を持ち「芸術院に推薦した小説家の筆頭に漱石」を挙げ、慶應義塾大学の文学科顧問就任時には教授職候補として「慶應義塾文学部の刷新に当たり、まず漱石に交渉した」とされる。

また、鷗外と漱石の間では著書の贈答や書簡のやり取りが行われていた。ただし、二人が顔をあわせた機会は２回のみである。

２－５　椀久物語（わんきゅうものがたり）・不安・當流人名辭書

幸田露伴著　[鷗外による自家製本]　１冊

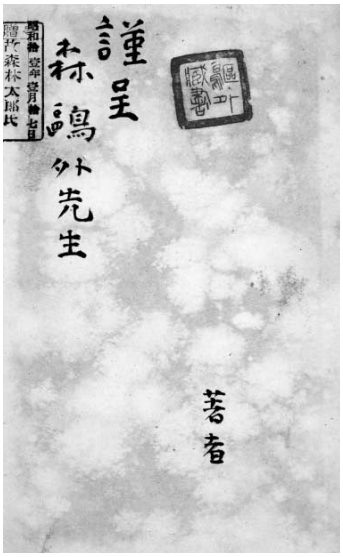


幸田露伴が『文藝倶楽部』第六巻第壱編（1900）に発表した小説「椀久物語」、およびその頃雑誌『新小説』に発表した随筆類を、鷗外が雑誌から抜き取って自ら一冊に製本し直したと推定されるものである。露伴の作品と直接関係のない印刷部分には上から紙が貼付されており、例えば「椀久物語」では冒頭の“『文藝倶楽部』第六巻第壱編”という表記が隠されている。

鷗外と露伴は20代に知り合い、その後十余年にわたる親交を持った。特に若い頃は鷗外の末弟が「（鷗外の自宅に）最も度々来られたのは幸田露伴氏であつたやうに思ふ」（森潤三郎『鷗外森林太郎』p.33）と書くほど親しく、鷗外自身も「この如き人に交ることを得た幸福を喜ぶことを辞せない」（『鷗外全集』第23巻 p.142）と記している。

２－６　短歌私鈔（たんかししょう）

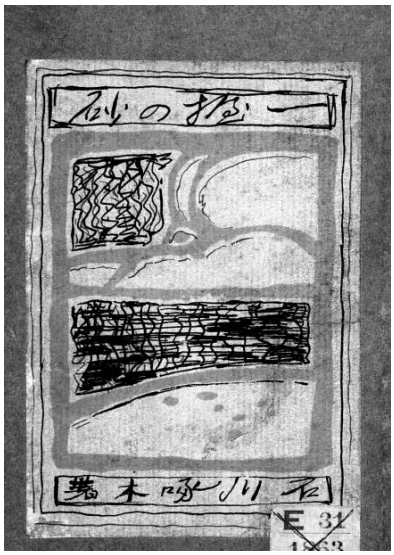
齋藤茂吉著　東京　白日社　1916　１冊



斎藤茂吉（1882－1953）の歌論が一本にまとめられた最初の著作であり、歌集『赤光』につぐ第２の著書である。茂吉が『赤光』（1913）の歌境を切り開いていくきっかけの一つは、「明星」・「アララギ」両派を宥和させるために森鷗外が発案した観潮楼歌会に参加した経験であると言われている。この歌会は、明治40年（1907）３月より43年（1910）４月まで、千駄木の鷗外邸で毎月１回催された。後年茂吉自身も「後進者として私などはいつも刺戟を受けることの多い会合であった」（『観潮楼断片記』）と回顧している。

２－７　一握の砂(いちあくのすな)

石川啄木著　東京　東雲堂書店　1910　１冊



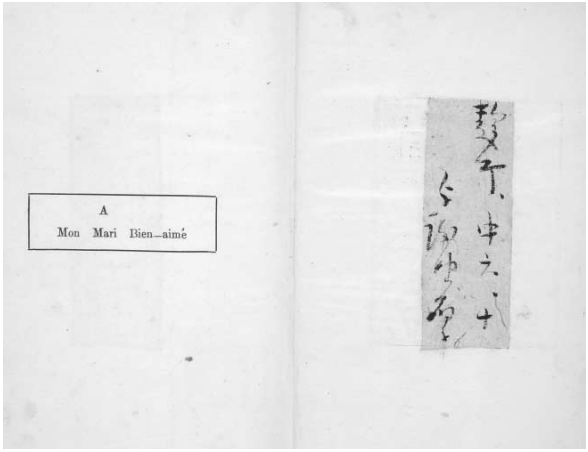
明治41年(1908)、上京した啄木は新詩社で『明星』を主宰する与謝野鉄幹に連れられて初めて観潮楼歌会に参加し、以後複数回にわたって観潮楼を訪れた。鷗外は、啄木からの相談に応じて啄木の小説原稿を出版社に買い取らせたりするなど、親身になって接した。『明星』廃刊後、啄木が発行人となって明治42年(1909)に創刊された雑誌を『スバル』と命名したのも鷗外である。啄木の処女歌集『一握の砂』は『明星』『スバル』などに掲載された短歌を中心にして刊行された。明治45年(1912)に啄木は26歳で没したが『スバル』は大正２年(1913)まで継続し、北原白秋・吉井勇・高村光太郎ら新詩社派だけでなく、佐藤春夫・堀口大学・谷崎潤一郎ら当時の期待の若手が小説や詩を寄せた。

２－８　青海波(せいがいは)

与謝野晶子著　東京　有朋舘　1912　１冊

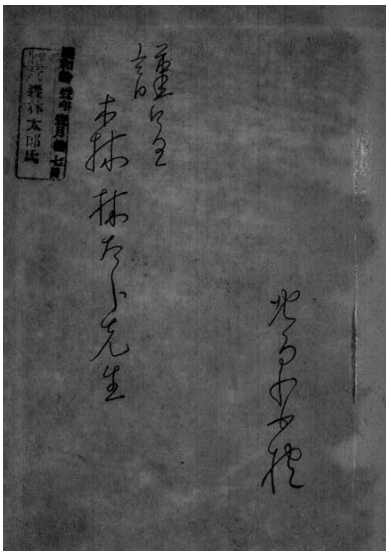
晶子が欧州歴訪の長旅に出る４か月前、明治45年(1912)１月に出版された歌集。短歌の歴史上、初めて出産を取り上げた歌も多く収められている。

鷗外所蔵本の標題紙裏には「麹町、中六、十　与謝野晶子」と当時の晶子の住所(東京市麹町区中六番町十)が記された紙の切貼がある。



２－９　雲母集：歌集（きららしゅう：かしゅう）

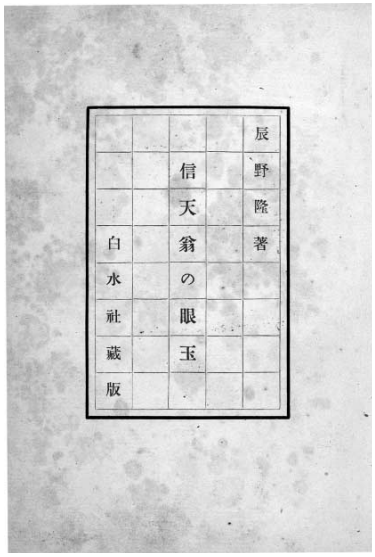
北原白秋著　東京　阿蘭陀書房　1915　１冊

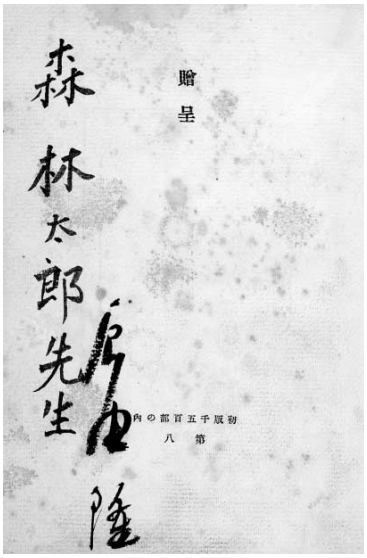


大正４年（1915）、すでに詩集『邪宗門』や歌文集『桐の花』で世評を確立していた北原白秋（1885－1942）は、弟とともに出版社・阿蘭陀書房を設立し、顧問に鷗外と上田敏（1874－1916）を迎えた。白秋はかつて「明星」派の若き歌人として観潮楼歌会にたびたび参加、『スバル』にも創刊時から参加し、鷗外とは長く関わりがあった。阿蘭陀書房からは鷗外の『詩歌集　沙羅の木』（1915）、与謝野晶子『新訳徒然草』（1916）、芥川龍之介『羅生門』（1917）などが出版された。白秋自身も自ら装幀を手がけた第二歌集『雲母集』などを出している。

２－10　信天翁の眼玉（あほうどりのめだま）

辰野隆著　東京　白水社　1922　１冊

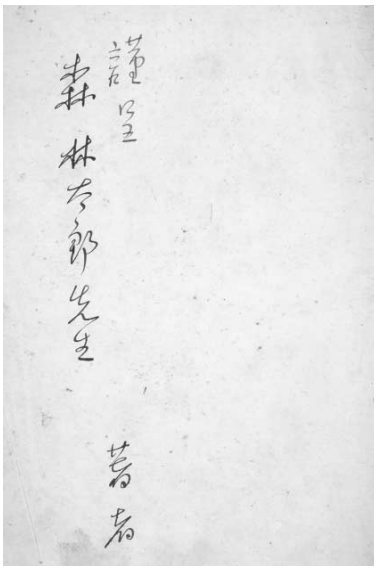




辰野隆（1888－1964）は、仏文学者、随筆家。本著作は、著者の処女評論集で、主としてフランス文学に関する紹介、小論文、感想等を集めたものである。一方、鷗外は、雑誌『スバル』に、1909－1913年の５年間55回にわたって『椋鳥通信』を連載したが、内容は海外の新聞の文芸欄を中心とした雑報の抄録と紹介であった。「露伴、鷗外、漱石は僕に取っては文学の三尊なのである」と鷗外を敬慕していた著者が、『椋鳥通信』から『信天翁の眼玉』のスタイルを思いついたとも言われている。

２－11　白き手の獵人：詩集（しろきてのかりゅうど：ししゅう）

三木露風著　東京　東雲堂書店　1913　１冊



本著作は、明治43年（1910）から大正２年（1913）までの作品集で52編の詩と７編の散文とからなる詩集であり、象徴詩の最も高度の成果といわれている。三木露風（1889－1964）は兵庫県生まれ、童謡「赤とんぼ」は山田耕筰によって作曲され、広く知られている。鷗外との出会いについて、『我が歩める道』の中で、『スバル』に詩を寄稿していた関係で参加した同派の文学者等の晩餐会において、鷗外から詩について敬意を表されたと述べている。

２－12　南蛮寺門前（なんばんじもんぜん）

太田正雄著　東京　春陽堂　（地下一尺集　第２）　1914　１冊

太田正雄は、木下杢太郎（1885－1945）の本名。本著作は、明治42年（1909）に雑誌『スバル』第２号巻頭に初出掲載された。杢太郎は、後に「今でも僕は残念に思っているのだが、それは僕の戯曲の第一作の『南蛮寺門前』をば、森先生が校正の時添削して下さるというのを、その時昴の第二号の編輯を引受けていた石川啄木の偏執からその機会を失したことである」と『南蛮寺門前』（『木下杢太郎全集』第14巻 p.138－142）の中で書いている。

杢太郎は鷗外について、その著作『森鷗外』において、鷗外の生活の時期を、「出生、少青年の時代」「軍医副及び留学の時代」「柵草紙の時代」「目不醉草の時代」「芸文及び萬年艸の時代、附日露戦役の前後」「豊熟の時代」「晩年」の７期に分けて、鷗外の略歴を著述しているが、後の鷗外史の枠組みの基本構造となった。

3 知識の沃野

劇作家・詩人の木下杢太郎は、森鷗外について以下のように評した。

森鷗外は謂はばテエベス百門の大都である。東門を入つても西門を窮め難く、百家おのおの一両門を視て他の九十八九門を遺し去るのである。(木下杢太郎『森鷗外』)

「テエベス」とは、古代エジプトの都テーベを指す。今も遺跡として残るこの大都市は、エジプト中王国から新王国にかけて大いに栄え、ホメロスの『イリアス』に「100の門を持つ」とうたわれた。木下は、鷗外の知識教養について、その幅広さに加え、それぞれの分野における深さを讃えて、この比喩を用いたのであろう。

実際に鷗外の知的活動の範囲は、当時としては非常に多岐にわたっている。文学においては、よく知られる私小説、歴史小説、史伝のほかにも、戯曲や詩歌、随筆も執筆し、さらにドイツ語の能力を生かして、各国文学の翻訳(ドイツ語以外からは、ドイツ語を通じた重訳)も数多く行った。また軍医として30年以上陸軍に勤務し、統計学や衛生学の導入の功績を残した(ただし陸軍の脚気対策を遅らせたとして批判も浴びている)。

そしてこれらの“本業”にとどまらず、ドイツ留学前後にはナウマンとの日本文化に関する論争、衛生学的観点からの都市計画論争、坪内逍遥との没理想論争といった論争を次々と展開するなど、論客としても知られた。晩年には、宮内省帝室博物館(現在の東京・京都・奈良の各国立博物館)総長兼図書頭や、帝国美術院(現在の日本芸術院)初代院長といった役職を務めるなどし、博物館の蔵書解題の作成、展示方法の改革などに取り組んだ。

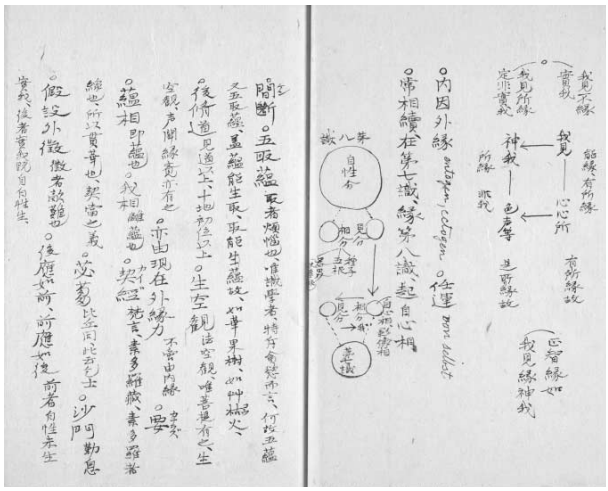
こうした活動領域の広さを支えた知識・教養の背景には、もちろん豊富な読書があるが、その土台には、鷗外が育った教育環境がある。森家は代々津和野藩の典医の家柄で、鷗外自身、幼い時から藩校の養老館で漢学・国学・蘭医学を学んだ。その後東京医学校で西洋医学とドイツ語を学び、陸軍時代のドイツ留学によって、これに磨きをかけている。また、留学の前後には、ドイツの図書を通じて性心理学や審美学にも触れている。そのため、鷗外の読書の対象は、洋書・和書・漢籍を問わず、古今東西・森羅万象に及んだ。鷗外文庫の図書を分類別に見渡すと、偏りはあれど、各分野満遍なく所蔵されている。所蔵されているだけではなく、各分野において、鷗外本人の書き込みが見られる図書が多数存在する。

また、鷗外自筆による写本や手抄本も少なくない。これらは、さまざまな資料からの引き写しや覚え書きのようなもので、作品に直接結びついているものもあれば、創作とはあまり関係が無さそうな、純粋な興味関心に基づくと思われるものもある。

このコーナーでは、鷗外の蔵書の中でもできるだけ幅広い分野の資料を紹介している。書き込みや自筆本を通して、鷗外の関心領域の広大さや、多方面の資料を読みこなす素養など、大都の偉容の一部でも感じとっていただければ幸いである。

3－1　唯識鈔（ゆいしきしょう）

［森鷗外自筆］　1冊



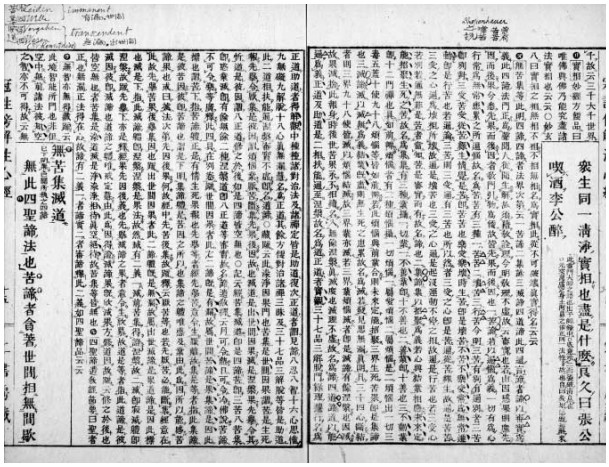
『成唯識論』の語釈や重要思想についての論述をはじめ、仏教の教理である唯識思想について鷗外が自筆によりまとめた資料。執筆時期は不明。

日記によれば鷗外は小倉時代に、同地の僧・玉水俊虡から唯識論の講釈を受けている（大正14年（1915）発表の小説『二人の友』に登場する「安国寺さん」が玉水である）。のちに戯曲『生田川』のような、唯識論の影響を受けた作品も発表するなど、鷗外の人物・作品と、仏教・唯識論との間には少なからぬ関係がある。

本書の各所に見られるドイツ語での註は、書写ではなく鷗外自身の解釈・見解と考えられる。鷗外の仏教観を探るうえで貴重な資料である。

3－2　冠註傍解注心經（かんちゅうぼうかいちゅうしんぎょう）

（宋釋）蘭渓道隆述（日本）町元呑空註解　京都　出雲寺文次郎　東京　森江佐七　明治20［1887］刊　1冊



『般若心経』の本文に蘭渓道隆が注を付けた『注心経』に対し、町元呑空がさらに注解を行った書。

鷗外の書入れは全篇にわたるが、おおむね二種類に大別される。第一には『大乗起信論』などの書物からの引用であり、鷗外が他書とも併せて読むことで『般若心経』の理解につとめたことが知られる。第二には、仏教語に対してドイツ語で語義を記したものであり、鷗外の仏教教学理解の過程がうかがわれて興味深い。14丁裏にはショーペンハウエルの名前も見えている。（出口）

3－3　陸氏草木鳥獸蟲魚疏圖解（りくしそうもくちょうじゅうちゅうぎょそずかい）

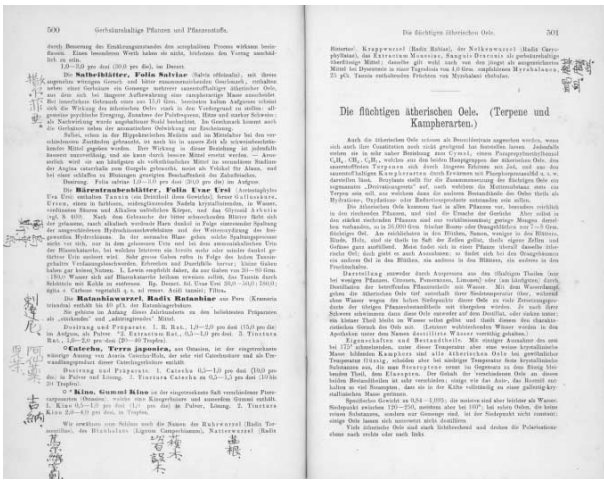
淵在寛述　京都　北村四郎兵衛　安永８［1779］［刊］　２冊

呉の陸璣による詩経の注釈書『毛詩草木鳥獸虫魚疏』に、近世中期の漢学者淵景山が、図と注解を付けた本。製本や題簽書きは鷗外自らが行っている。

上部にところどころ朱筆の書入れがあり、その部分が小口の上部にはみ出している。書入れそのものは鷗外ではなく別人によるものである可能性が高いが、鷗外が再製本のため本の上部を裁断した際に、書入れの内容が切れないようにわざわざその部分を余分に残したために、このような形になっている。鷗外の几帳面さや、この分野への関心を示すものとして注目される。（合山、一部改編）

3－4　Handbuch der Arzneimittellehre

H. Nothnagel und M.J. Rossbach Berlin August Hirschwald 1884　5. gänzlich umgearb. Aufl. 1v.



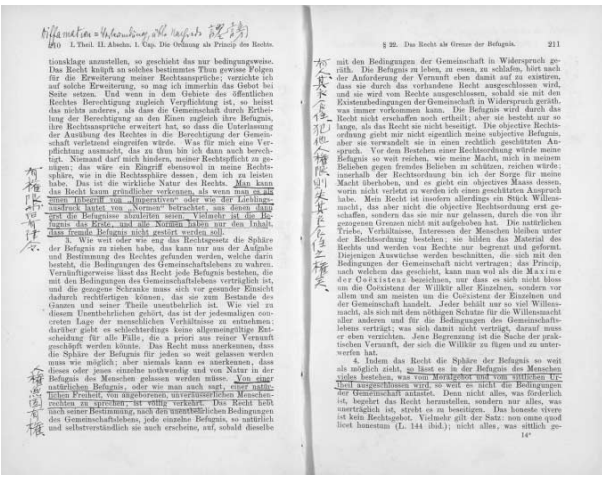
ノットナゲル、ロスバッハ共編『薬理学ハンドブック』第５版。

薬品を化学的に分類し、生理学的効果と治療上の用途について解説している書籍である。

鷗外の書入れは、ドイツ語、ラテン語の用語の横に漢語を対照したものが多いが、ひとつの洋語に対し複数の漢語（当て字を含む）を書き入れたり、医学現象に関連のある漢籍からの引用を書き入れたりしている箇所もある。ドイツ語の理解補助ということにとどまらず、西洋医学と東洋医学を多重的に関連づける試みとも考えられる。巻末には他の版との異同も付す。（河野、一部改編）

3－5　System der Rechtsphilosophie

Adolf Lasson Berlin Leipzig J. Guttentag 1882 1v.



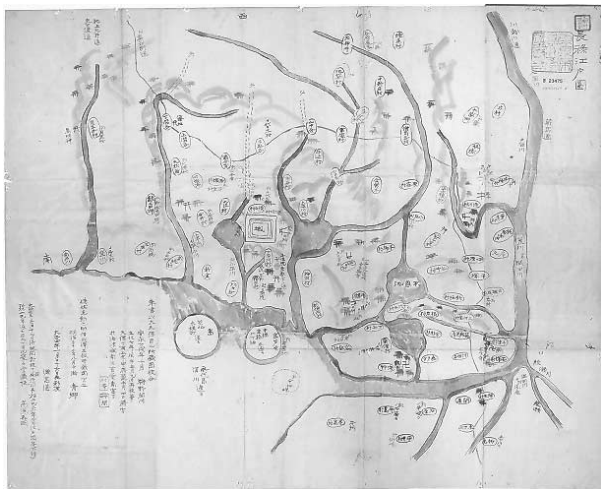
アドルフ・ラッソン著『法哲学体系』。

ラッソンはドイツ観念主義の哲学者として知られ、本書は彼の主著のひとつ。序文の他に、法と秩序、法と実践理性(「実心」)、法と正義、法と自由に関する章など限られた章にドイツ語と漢語での書入れ・下線が集中している。

1887年に書かれた鷗外の断片的覚書“Eindrücke”［感想］に、“Die Civilization ruht auf die historische Grundlage ; Vergl. Lasson, Rechtsphilosophie”(「文明は歴史的基礎の上に立つ。ラッソンの法哲学と比較せよ。」)との記述がある。しかしこれは本書から直接引用したのではなく、序文にあるドイツ等ヨーロッパ諸国の国民性についての議論、あるいはラッソンの歴史的方法論についての議論に関する、鷗外自身による要約と思われる。(河野、一部改編)

3－6　長禄江戸圖(ちょうろくえどず)

森鷗外［写］1915.1　1舗



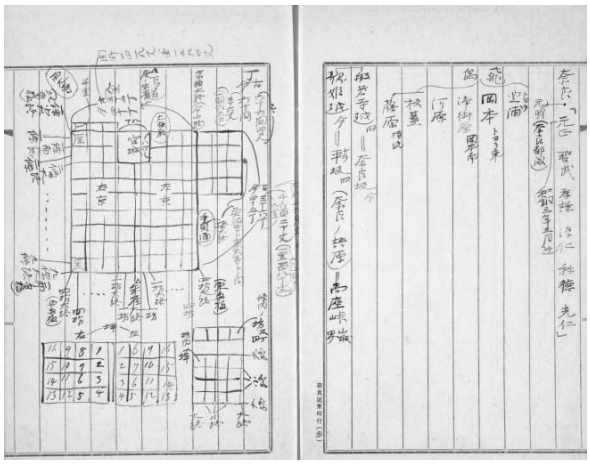
鷗外自身が模写した、彩色のほどこされた江戸図である。

本図には長禄年間(1457－1460)の年号が冠されているが、実際には近世中後期ころに成立した推測図である。巻末の識語によれば、鷗外はこの地図を大正4年(1915)1月に模写し、さらに同年3月に弘化2年(1845)に栄々堂が板行した図と校合している。鷗外は原図の識語も写し取っているが、それによれば本図はもともと、安永7年(1778)に画家の狩野閑川が写したものであった。閑川によるその図は、天保15年(1844)にふたたび謄写され、佐久間象山の門人で、のちに外務省書記官を勤めた北沢正誠《まさのぶ》の所蔵となっていた。その北沢蔵の図が、青郷なる人物によって明治32年(1899)にさらに写されたものを、鷗外が模写したという複雑な過程をたどっている。

鷗外は武鑑とともに古地図も多数蒐集していたが、みずから写した地図はきわめて珍しい。(出口、一部改編)

3－7　奈良小記（ならしょうき）

［森鷗外自筆］　2冊



鷗外は大正7年から10年（1918－1921）まで、帝室博物館総長として毎年11月に奈良に赴いており、本書はその際に作成されたものと考えられる。奈良古蹟探訪の参考のために記された、鷗外自筆の備忘録である。

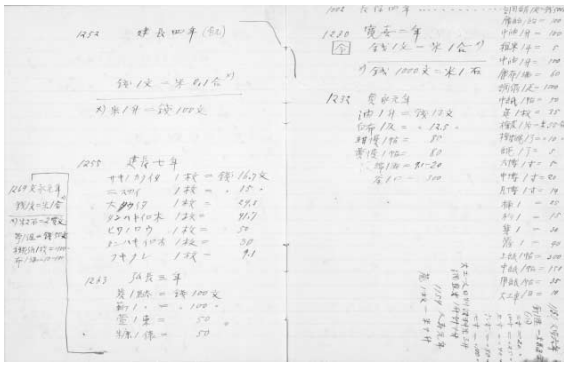
第1冊は「寺院」、「建築」、「芸術」、「仏経」、「戸籍」などの項目を立てた、覚書様のノートである。大部分が『鷗外全集』第20巻に収録されているが、巻末に付された「正倉院蔵古写王勃文巻首」（澁江保筆）と、「鳥毛篆書屏風六扇」・「鳥毛帖文書屏風六扇」についての記録、新薬師寺の略縁儀（印刷）は、鷗外の筆ではなく、『鷗外全集』には収録されていない。第2冊には、奈良の各社寺についての記録、そのほかの雑多なメモを収める。（出口、一部改編）

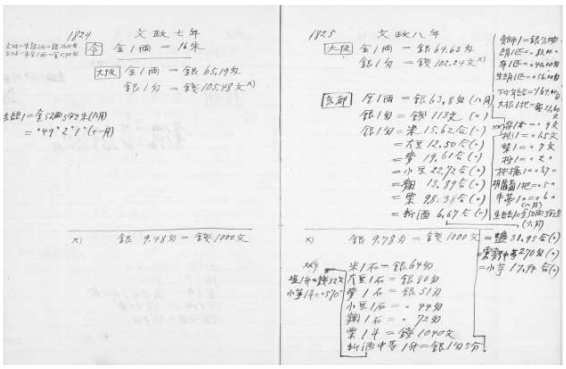
3－8　金銀銅價考（きんぎんどうかこう）

［森鷗外自筆］［1921］　2冊

顕宗天皇2年（486）から明治6年（1873）までの、金銀銅価の交換比率や、米価への換算を年ごとに記したノート。交換比率だけでなく、食品や生活用品等の価格、人馬賃銭、人足手当、画料、遊女の揚代などの記載もみられる。上下2冊ともに鷗外の筆による。合判補助簿に青（黒）インクで記されており、所々に異なる色のインクで補記された部分が見られる。

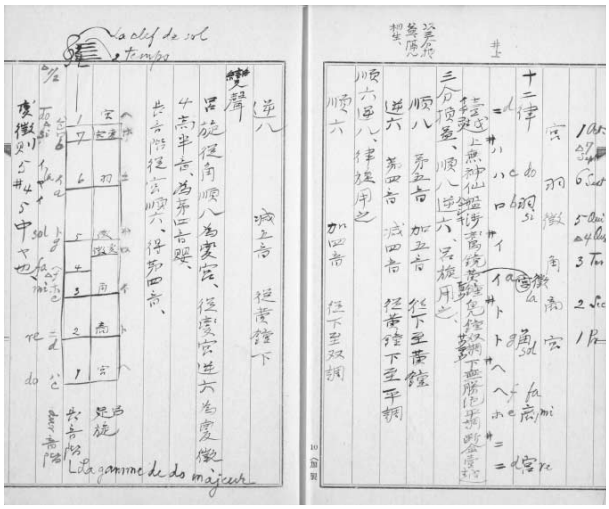
下巻末の「西村兼文本朝物価表七巻大正十年九月二十二日対校了」という識語から、本資料の成立は大正10年（1921）9月以前ということ、また校訂の際には西村兼文「本朝物価表」を参照したことがわかる。この「本朝物価表」を翻刻した『日本産業資料大系』第8巻には、「宮内省文庫所蔵の西村兼文氏の自筆と称せられる原本に拠つた」とあることから、鷗外もこの自筆本を参照したのではないかと考えられる。ただし、この資料は一部の補足に使用されただけであり、他にどのような資料を用いて本資料が製作されたかは定かではない。（渋谷、一部改編）





3－9　樂小記（がくしょうき）

［森鷗外自筆］　3冊

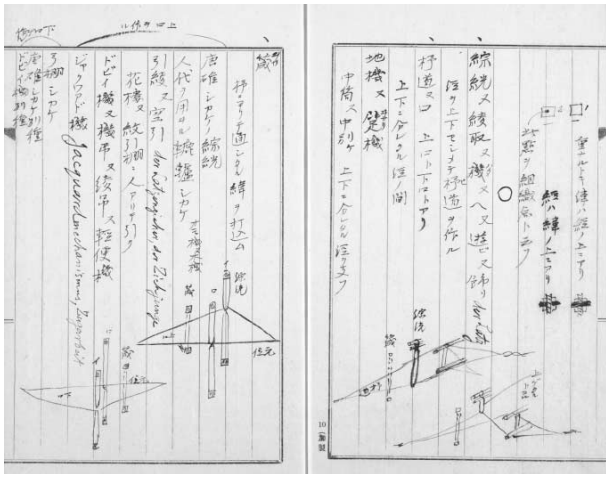


鷗外の音楽に関するノート。中巻の末尾二葉が「奈良近東印行」の原稿用紙であることから、帝室博物館館長として奈良と東京を往復しつつ書かれた晩年のメモの一つと考えられる。

注目すべきは、上巻における琴や尺八に対する平均律の計算や各楽器固有の調性関係を検討するという、ドイツ音楽の素養を活かした試みである。同巻では他に日本音楽の起源を印度音楽に求める意見が『仏教全書』などを基に述べられており、これはチェンバレン『日本事物誌』などにも通底する考察である。随所に挿入された音階図や朱筆書き入れから窺われる鷗外の正確な音楽理解は、大正期知識人の音楽観を詳細に伝える貴重な資料となっている。中巻・下巻では『資治通鑑』、『康熙字典』、『文机談』、『拾芥抄』、『仙隠伝』などを基に、楽器名、調名が細かく考証されている。（多田）

3－10　織紝小記（しょくじんしょうき）

［森鷗外自筆］　1冊

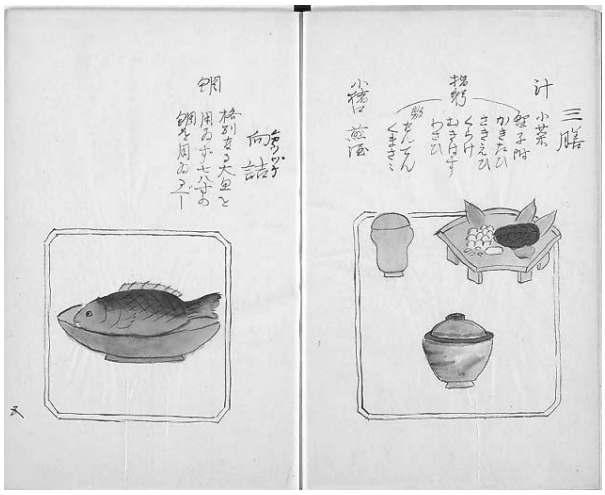


吉田亀寿著『織物組織篇』（大日本織物協会刊、明治30年（1897）12月）から抄写したノート。手機、力機、ドビー機など織機の種類や構造について、また平織、綾織、繻子織などの織物種類、並子、斜子、斜文などの文様の種類などがそれぞれ図を交えて詳細に写されている。後半には、『字典』から織物関連用字・用語の抜書がされており、英訳やドイツ語訳がなされている。また、『織物組織篇』巻末記載の織物用語英訳一覧からも抜書がされている。

鷗外の晩年に散見される山加製原稿用紙が使用されている。鷗外の多方面への関心を伝える資料である。（神田、一部改編）

3－11　膳部之事（ぜんぶのこと）

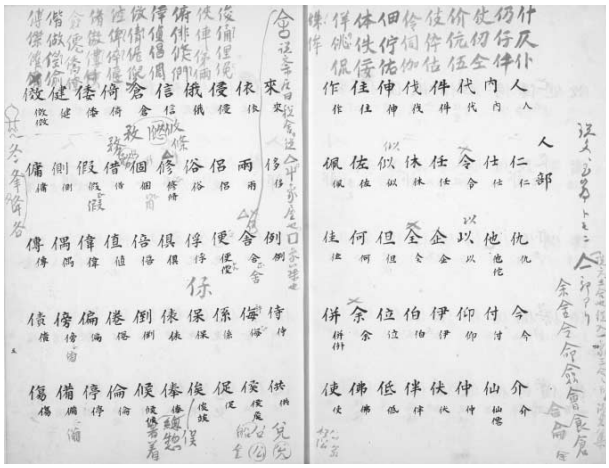
［森鷗外自筆］　1914.2　1冊



鷗外の自筆写本。「右一巻大谷先生より拝借写〇天保十亥年正月中旬、大正三年十二月二十九日手写　源高湛」とあるが底本は未詳。内容は熨斗の作り方、本膳料理の配置や献立、鉢や提子、銚子などの食器類についてであり、それぞれ図を添えて解説してある。後半は「飯くひやう」と題した食事作法についての記事。図には丁寧な彩色がなされており、字が勝ったものが多い鷗外のノートの中でも異色といえる。（神田）

3－12　漢字整理案（かんじせいりあん）

文部省［著］東京　西東書房　1920［刊］1冊

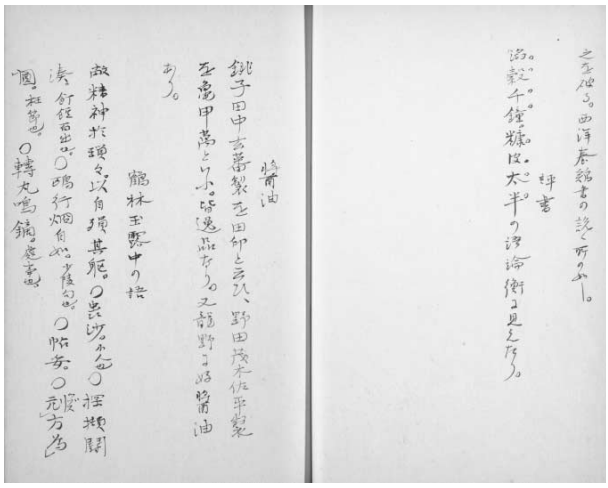


文部省普通学務局編による漢字整理案。凡例には「本案ハ尋常小学校ノ各種教科書ニ使用セル漢字二千六百余字ニ就キテ、字形ノ整理ヲ行ヒ、其ノ標準ヲ定メタルモノナリ」とある。

全篇にわたって鷗外の朱筆書入れがあり、本字や異体字についてのメモ、『説文』からの引用、あるいは書き順の案などが記されている。明治41年（1908）の臨時仮名遣調査委員会で「仮名遣意見」を述べ、大正10年（1921）には臨時国語調査会の会長になるなど、国語政策に積極的に関わっていた鷗外の漢字に対する関心の深さが示されている。（小谷）

3－13　塵冢(ちりづか)

［森鷗外自筆］　2冊



鷗外自筆による雑記録。執筆時期は明治32年から明治40年(1899－1907)ごろと推測される。

内容の多くは自身のための覚え書き程度のもので、題名(ごみ溜めの意)もそれから採ったものであろう。分野は宗教・博物誌・地誌・軍事・医事・語彙など多岐にわたり、鷗外の関心領域の広さを示している。

なお本資料は『鷗外全集』第37巻(岩波書店　1975)に全文が収録されている。

4 作品の原点

鷗外文庫は森鷗外の旧蔵書からなるコレクションである。鷗外が折にふれて読んだり、執筆の参考にしたりした書籍であるから、鷗外自身の作品や著書はほとんど無く、直筆原稿や日記・書簡なども含まれていない。特徴としてよく言われるのは、歴史・芸術・文学等の人文科学から軍事・医学といった自然科学までの広範な分野を含み、古典籍から当時の新刊書に至るまで洋の東西を問わず収集された、その資料の多種多様さである。また、鷗外自身による書入れがあるものや執筆の過程で収集した参考資料やノート類を装丁したものが多く残されているのも大きな特色である。

本コーナーでは、このような鷗外文庫の特徴をふまえ、鷗外作品からいくつかを取り上げ、その作品に直結する資料、いわば「作品の原点」といえるものを紹介する。最初に取り上げるのは、史伝三部作といわれる『渋江抽斎』(1916)、『伊沢蘭軒』(1916－1917)、『北条霞亭』(1917－1921)である。鷗外の書簡や日記によれば、鷗外はこの三部作の執筆にあたって、知人や被伝者の子孫などに手紙を書いたり、面会したりして資料の収集を依頼していたことがわかる。鷗外文庫には、こうして収集した資料や執筆のためのノートなどをまとめ、柿色の表紙を付けて糸綴じし、鷗外自筆の題簽を貼ったもの(鷗外文庫本によく見られる装丁である)が残されており、鷗外作品を研究する上で欠くことのできない重要な資料としてかねてから注目されている。

ついで、史伝三部作から『渋江抽斎』を選び、作中重要な役割を担っている武鑑という資料を取り上げる。鷗外文庫の中で比較的大きなまとまりを持つものに、江戸時代の武家名鑑である武鑑と古地図(江戸図)がある(下段の表を参照)。特に『渋江抽斎』では、医師・儒者であった抽斎が武鑑・江戸図の収集家であったところに鷗外が大いに共感を持っていたことが読み取れ、執筆のきっかけを作った資料といっても過言ではないだろう。ここでは、ごく一部分ではあるが、『渋江抽斎』に登場する武鑑などの関係資料を展示することによって、その執筆過程の追跡を試みたい。

最後に、史伝三部作以外の作品として、歴史小説から『魚玄機』(1915)、『大塩平八郎』(1914)、『堺事件』(1914)の三作品。これらの資料からは、歴史小説とはいえ、鷗外が同時代の人々やできごとからも大きな影響を受けていたことや歴史を題材にする際の執筆態度などがうかがわれる。また、鷗外は数多くの作品を翻訳したことでも知られているが、その中からドイツの短編小説とオペラ、そして著名な思想家ルソーの自伝(『告白』)の翻訳の元となったドイツ語の洋書を鷗外の書入れとともに紹介する。これらの資料は、文豪と呼ばれる鷗外の創作活動が非常に幅広いものであったことの一端を示すものとなろう。

鷗外文庫の武鑑関連資料と江戸図(現在所在が確認されているもの)

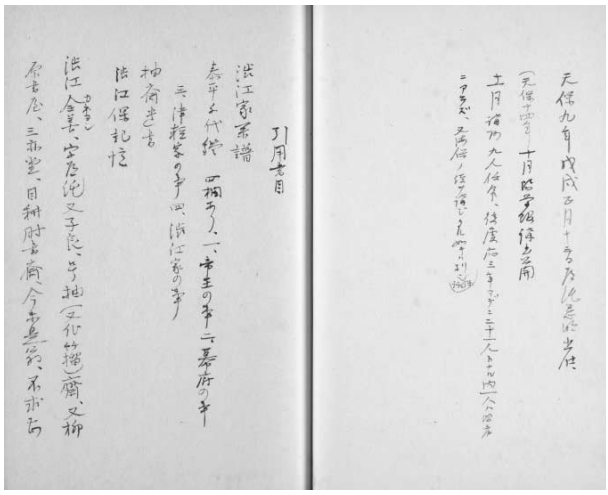
○武鑑(＊)	260点	953冊	○江戸図	101点(舗)
○分限帳等	7点	16冊	○江戸切絵図	40点(舗)
○公家名鑑	81点	149冊		

＊自筆題簽等から鷗外が「武鑑」と判断したものの数量で、例えば『治代普顕記』(資料４－10)等も含んでいる。他に９点19冊が所在不明となっている。

ちなみに、『鷗外全集』第20巻 p.808では、267部971冊に及ぶとある。

４－１　澀江家乗（しぶえかじょう）

［森鷗外自筆］　１冊



本書は鷗外史伝三部作の第一作である『渋江抽斎』の基礎資料となったものである。『渋江抽斎』執筆の経緯は作品中に詳しく記されているが、抽斎の子である渋江保との邂逅と保からの資料提供は作品成立に際して決定的に重要であった。本書の内容が作品の序盤に反映していること、掉尾には保の娘である乙女について「大正四年十六歳」とあることなどから、鷗外と保が初めて会談した大正４年(1915)10月ころの成立と推定でき、鷗外文庫蔵の『渋江抽斎』関係資料の中でも最も早い段階のものであると考えられる。展示箇所は鷗外自筆になるもので、「引用書目」として挙げられている中に、「渋江保記憶」とあるのが作品の起源を思ううえで興味深い。この後に抽斎の伝記が27枚にわたって綴られている。(出口、一部改編)

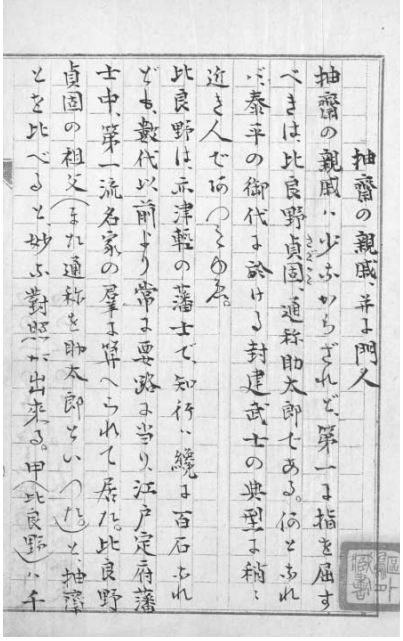
４－２　抽齋年譜（ちゅうさいねんぷ）

［澁江保自筆］　１冊

渋江保自筆の原稿を鷗外が１冊に綴じた本。『渋江抽斎』執筆のため、鷗外が年譜の作成を求めた(大正４年(1915)11月４日付渋江保宛書簡)のに応じて、渋江保が執筆した。作中に「保さんと会見してから間もなく、わたくしは大礼に参列するために京都へ立った。勤勉家の保さんは、まだわたくしが京都にいるうちに、書きものの出来たことを報じた。わたくしは京都から帰って、直に保さんを牛込に訪ねて、書きものを受け取り、また『独立評論』をも借りた。」(『渋江抽斎』その九)とあるのが本書である。内容は文化２年(1805)の抽斎１歳から、安政５年(1858)の54歳までの年譜であり、一部に鷗外の書入れが見られる。編年体を取る『渋江抽斎』は、本書に大きく依拠する。展示箇所は、抽斎が没した54歳のときの記述で、保(成善)の教育についての遺命が記されている。(出口、一部改編)

４－３　抽齋の親戚、并に門人（ちゅうさいのしんせき、ならびにもんじん）

［澁江保自筆］　１冊


抽齋の親戚并に門人

抽齋の親戚に少ふかりざれど、第一に指を屈すべきは比良野貞固、通称助太郎なるべし。泰平の御代に於ける封建武士の典型に稍〻近き人なりとす。

比良野は示津藩の藩士で、知行に纔に百石なれども、數代以前より常に要路に当り、江戸定府藩士中、第一流名家の譽に擬へられて居た。比良野貞固の祖父（また通称を助太郎といひ）と抽齋とを比べると、妙に對照が出来る。甲（比良野）は千

渋江保自筆の原稿を鷗外が１冊に綴じた本。巻末に渋江保筆の「抽斎の学説」を付す。『渋江抽斎』執筆のため、鷗外が「抽斎ノ親戚並ニ門人」及び「抽斎ノ学説」の題で渋江保に作成を求めた（大正５年（1916）１月24日付渋江保宛書簡）ところ、早くも鷗外の２月６日付渋江保宛書簡には本書の完成への礼辞が掲げられている。

抽斎の親戚中で「第一に指を屈すべき」人物としてここに記されている比良野貞固は抽斎の二番目の妻威能の弟である。ここに「封建武士の典型」と書かれているように謹直な人物で、『渋江抽斎』作中で鷗外は共感を持って描いている。（出口、一部改編）

４－４　抽齋歿後（ちゅうさいぼつご）

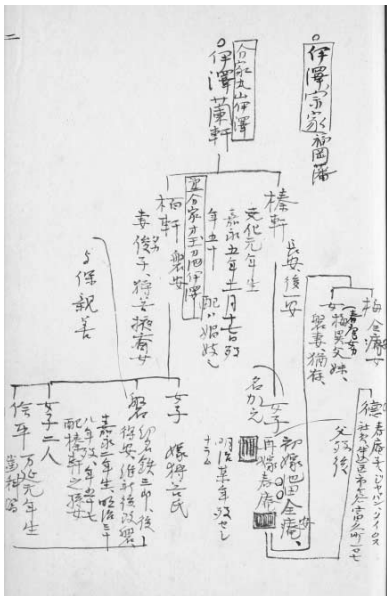
［澁江保自筆］　１冊

渋江保筆の原稿を鷗外が１冊に綴じた本。題名は鷗外自筆の題簽によるが、内題として渋江保自筆で「抽斎歿後の渋江家と保　附五百」とある。数章に段別されており、逐次的に鷗外のもとに送られたと考えられる。鷗外が史伝『渋江抽斎』を書くため、渋江保に父についての回想録を依頼し（大正５年（1916）３月６日付渋江保宛書簡）、それに応じて保が書いた原稿である。内容は抽斎没後の渋江家の人々に関する回想が中心で、生前の抽斎、四番目の妻五百（保の母）らについての挿話も含まれている。

特に鷗外は五百に強い親しみを覚えたようで、『渋江抽斎』の中で数々の印象的な場面を記している。展示部分はそのうちの一つで、金を奪おうとして渋江家に来た詐欺侍に抽斎が脅迫されていたところ、入浴中だった五百が裸のまま飛び出して「懐剣を口にくはへ、左右の手に各々一箇の熱湯の入りたる小桶を携へ出でゝ」退治したくだりである。（『渋江抽斎』その六十、六十一）（出口、一部改編）

4－5　伊澤文書（いざわもんじょ）

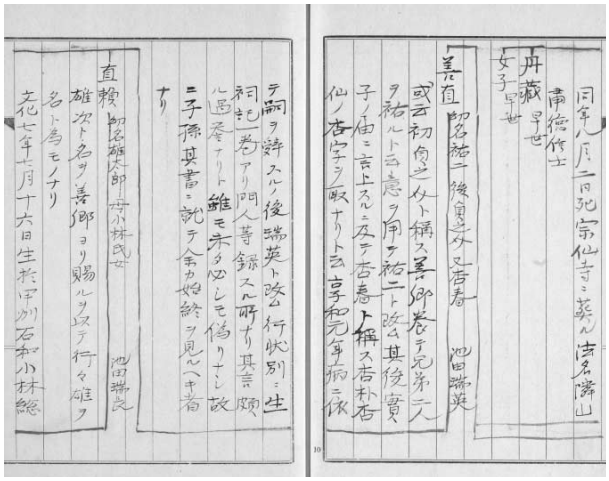
［森鷗外ほか写］　1916　4冊



伊澤蘭軒の子孫伊澤徳から提供を受けた資料の写しで、鷗外史伝三部作の第二作『伊澤蘭軒』の基本資料となった。展示部分は鷗外自筆と思われる家系図で、分家二代目の蘭軒から五代目徳までが記されている。すでに和田万吉（東京帝国大学教授・附属図書館長）が同じ資料を基に蘭軒伝を著していたので、鷗外は重ねてこれを記すに当たって、以下のように執筆の態度を明らかにしている。「わたくしはこう云う態度に出づるより外無いと思う。先ず根本材料は伊沢徳さんの蘭軒略伝ないし歴世略伝に拠るとする。これは已むことを得ない。和田さんと同じ源を酌まなくてはならない。しかしその材料の扱方において、素人歴史家たるわたくしは我儘勝手な道を行くこととする。路に迷っても好い。若し進退維れ谷まったら、わたくしはそこに筆を棄てよう。所謂行当ばったりである。これを無態度の態度と謂う。」（『伊澤蘭軒』その三）

4－6　池田京水文書（いけだきょうすいもんじょ）

［森鷗外自筆］　1917　1冊



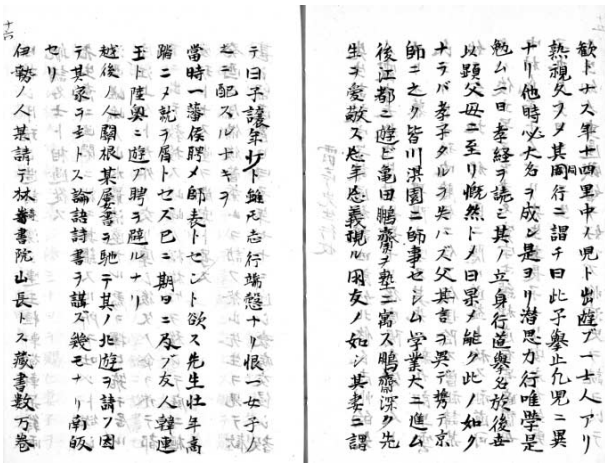
本書は二世池田全安所蔵の池田京水自筆の巻物を、鷗外が筆写したものである。内容は、「参正池田家譜」、「水津家系図」、「寛政庚申書上」、「池田分家過去帳」の4部からなっている。

鷗外は『渋江抽斎』その十五で、抽斎に種痘の術を授けた池田京水の出自に疑いを持ったが、この時はまだ依るべき資料が十分ではなかった。その後、京水の縁者二世池田全安を知り、京水自筆の巻物を見ることを得た（『伊澤蘭軒』その二百二十一）。これを基に鷗外は、京水が継母に憎まれて継嗣を辞退し、分家を立てて後大成した次第を記している。

展示箇所は、「参正池田家譜」の池田善直（京水）記載の箇所である。この系図は京水の父池田錦橋が幕府に提出するために作成したものが元になっており、継嗣辞退について「病ニ依テ嗣ヲ辞スル」（病のために跡継ぎを辞退する）と書かれている。

4－7　北條文書（ほうじょうもんじょ）

1冊

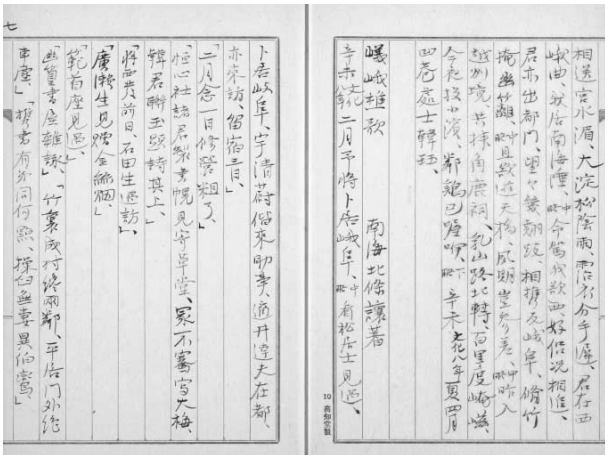


北条霞亭に関連する資料を1冊に綴じた本。鷗外史伝三部作の第三作『北条霞亭』の資料となった。『北条霞亭』その三に、「福田禄太郎さんの手より許多の系譜、行状、墓表等の謄本を贈られた」とあるが、それらの資料をまとめたものや、大正5年(1916)11月28日島田青峰宛書簡で鷗外が依頼した、「北条御一家ノ戒名歿年歿時ノ齢」の書抜き、秋荘老人・横山廉次郎・浜野知三郎の来翰などが付されている。

展示箇所は「霞亭先生行状」の一部である。霞亭14歳のとき、通りすがりのある「士人」が霞亭の人相を見て「必大名ヲ成ン」と言ったという挿話(その五)や、亀田鵬斎に愛されたこと(その八)等、多くの箇所が作品中に取り込まれている。(出口、一部改編)

4－8　霞亭小著鈔（かていしょうちょしょう）

［森鷗外自筆］　1冊

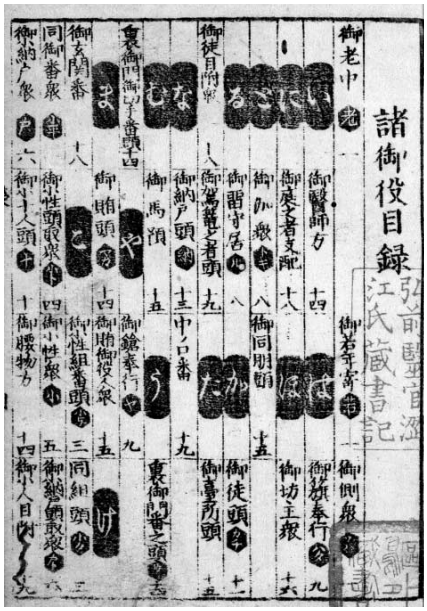


北条霞亭の著である「霞亭渉筆」、「嵯峨樵歌」、「薇山三観」、「帰省詩嚢」、および山口凹巷(韓聯玉)の著である「芳野游藁」を、鷗外が抜萃したノート。『北条霞亭』その二に、「わたくしは蘭軒伝を草するに当って、夙く霞亭渉筆、嵯峨樵歌、薇山三観三書の刊本を浜野氏に借りて引用することを得た。薇山三観は後に帰省詩嚢と合刻せられたが、わたくしは後者の単行本を横山廉次郎さんに借りて読んだ」とある。

「嵯峨樵歌」は霞亭が京都嵯峨に隠棲した時期に作った詩を集めたもので、展示部分は本文の冒頭である。鷗外は『北条霞亭』執筆の動機を語って、霞亭の嵯峨隠棲を自身の若いころの夢に重ね合わせ、かつて理想として抱いた隠遁者の生活を敢えて為した霞亭の生涯に興味をひかれたことを記している。(『北条霞亭』その一)(出口、一部改編)

4－9　武鑑　文化十二年（ぶかん　ぶんかじゅうにねん）

江府　千鐘房須原屋茂兵衛　文化12［1815］［刊］　5冊



「この蒐集の間に、わたくしは「弘前医官渋江氏蔵書記」という朱印のある本に度々出逢って、中には買い入れたのもある。わたくしはこれによって弘前の官医で渋江という人が、多く「武鑑」を蔵していたということを、先ず知った。」（『渋江抽斎』その三）

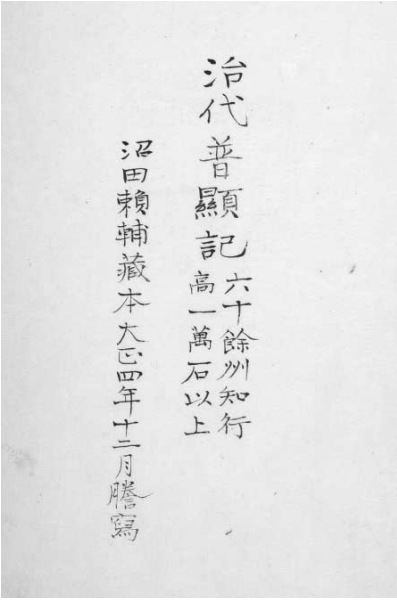
鷗外と抽斎との武鑑を通しての出会いを語った印象的な場面である。

武鑑とは、江戸時代に大名家及び幕府の役人に関する記載を中心にして、民間で出版された武家の名鑑のこと。江戸時代前期には「御紋尽」「御紋鑑」「江戸鑑」などの名称で京や江戸の複数の板元から出版されていたものが、次第に江戸の板元に限られるようになり、後期になると「（年号）武鑑」に代表される須原屋と「大成武鑑」に代表される出雲寺との競合関係へと移っていく。

本資料には全5冊のうち3冊の冒頭に抽斎の蔵書印（朱印）が押されている。現時点でこの蔵書印が確認されているのは、鷗外文庫中では本資料のみである。

4－10　治代普顕記　六十餘州知行高一萬石以上（ちだいふげんき　ろくじゅうよしゅうちぎょうだかいちまんごくいじょう）

鎌田家時［著］［森鷗外自筆］　1915　1冊



「それは沼田頼輔さんが最古の「武鑑」として報告した、鎌田氏の『治代普顕記』中の記載である。沼田さんは西洋で特殊な史料として研究せられているエラルヂックを、我国に興そうとしているものと見えて、紋章を研究している。そしてこの目的を以て「武鑑」をあさるうちに、土佐の鎌田氏が寛永十一年の一万石以上の諸侯を記載したのを発見した。即ち『治代普顕記』の一節である。沼田さんは幸にわたくしに謄写を許したから、わたくしは近いうちにこの記載を精検しようと思っている。」（『渋江抽斎』その三）

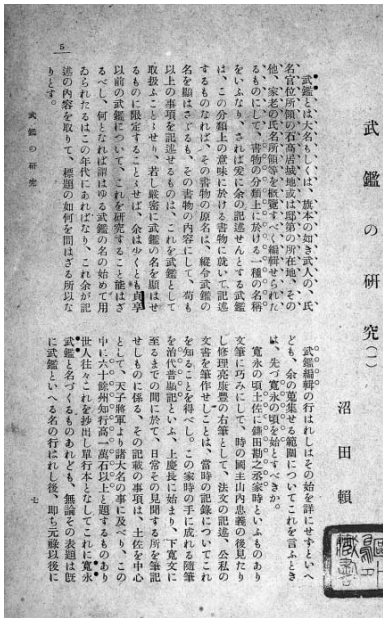
土佐藩2代藩主山内忠義の父康豊の右筆・鎌田家時が著した、江戸時代前期のことを記す随筆で、寛文4年（1664）

の忠義の死までのことを記す。本資料の扉には「沼田頼輔藏本大正四年十二月謄寫」、跋文末には「寛永十一／極月日　鎌田勘丞／家時」とあり、『渋江抽斎』中の記載と符合している。鷗外は、その後の「精検」により寛永13年(1636)のものと考証し、表紙に「寛永武鑑　寛永十三年」と自ら記した題簽を貼付している。

なお、近年の研究によれば、本書は個人の随筆であり民間の出版物でもないので、武鑑の範疇には入らないとされている。ただし、大名家の紋所・知行高・氏名・官職・居城などを記したものが既に寛永年間に編まれていたことは、武鑑という資料の成り立ちを考える上で沼田頼輔や鷗外同様に注目してよいだろう。

4－11　武鑑の研究(一)(ぶかんのけんきゅう)

沼田頼輔［著］［東京］［古書保存會］［1915］　1冊



武鑑の研究(一)　沼田頼輔

武鑑とは、大名もしくは、旗本の知き武人の、氏名、官位、所領(石高、居城、地域、又は邸第の所在地、その他、家老の氏名、所領等なども、記載せられたるものにして、書物の分類上に於ける一種の名称をいふなり、されば爰に余の記述せんとする武鑑は、この分類上の意味に於ける書物に就いて記述するものなれば、その書物の原名は、縱令武鑑の名を賜はざるも、その書物の内容たして、苟も以上の事項を記述せるものは、これを武鑑として取扱ふことせり、若し厳密に武鑑の名を賜はせるものに限定することせば、余はかくとも、則以前の武鑑について、これを研究することは能はざるべし、何となれば謂はゆる武鑑の名の始め用ゐられたるはこの年代にあればなり、これ余が記述の内容を取りて、穏当の如何を問はざる所以なり。

武鑑編輯の行はれしはその始を詳にせずといへども、余の蒐集せる範圍についてこれを言ふときは、先づ寛永の頃土佐に鎌田勘之丞時といふものあり、寛永の頃に巧みにして、時の國主山内忠義の後見たりし修理亮康豊の右筆として、法文の記述、公私の文書を筆作せしことは、當時の記録についてこれを知ることを得べし。この家時の手に成れる随筆を治代書抄記といふ、土慶長に始まり、下寛文に至るまでの間に於て、日常その見聞する所を筆記せしものに係る、その記載の事項は、土佐を中心として、天子將軍より諸大名の事に及べり、この中に、六十餘州知行高一萬石以上と題するものあり、世人往々これを抄出し単行本となしてこれに寛永武鑑と名づくるものあれども、無論その表題は既に武鑑といへる名の行はれし後、即ち元禄以後に

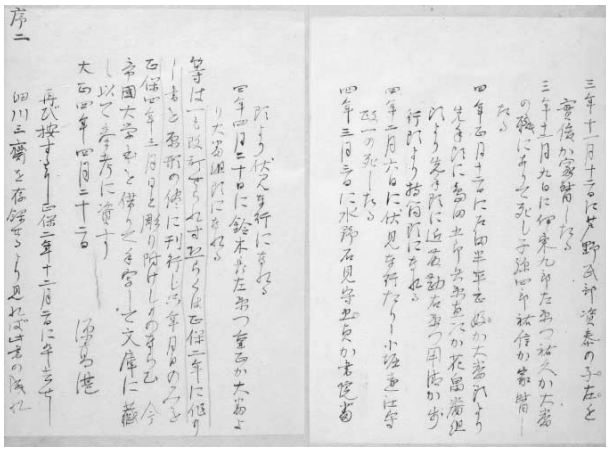
大正４年(1915)発行の雑誌『典籍』第２号の抜刷。「沼田頼輔さんが最古の「武鑑」として報告した」という、その報告にあたるもの。

沼田頼輔(1867－1934)は明治～昭和前期の歴史学者、紋章学者。大著『日本紋章学』(明治書院　1926)で知られ、土佐山内家の家史編纂にも携わっている。

鷗外の大正４・５年(1915・1916)の日記には、沼田頼輔との間で手紙や資料のやりとりをしていたことが記されている。鷗外文庫本の「御大名武士鑑」(鴎 H20：870)も資料４－10同様、沼田頼輔所蔵本からの転写本である。

4 ―12　正保四年改御大名並御旗本記（しょうほうよねんあらためおだいみょうならびにおはたもとき）

［森鷗外自筆］　1915　1 冊



「そんなら今に迫るまでに、わたくしの見た最古の「武鑑」乃至その類書は何かというと、それは正保二年に作った江戸の「屋敷附」である。これは殆ど完全に保存せられた板本で、末に正保四年と刻してある。ただ題号を刻した紙が失われたので、恣に命じた名が表紙に書いてある。この本が正保四年と刻してあっても、実は正保二年に作ったものだという証拠は、巻中に数カ条あるが、試みにその一つを言えば、正保二年十二月二日に歿した細川三斎が三斎老として挙げてあって、またその第を諸邸宅のオリアンタションのために引合に出してある事である。この本は東京帝国大学図書館にある。」（『渋江抽斎』その三）

鷗外自身も「わたくしは現に蒐集中であるから、わたくしの「武鑑」に対する知識は日々変って行く。」（『渋江抽斎』その三）と述べているが、その後の研究によれば、寛永20年（1643）刊のものも確認されており、正保年間（1644－1648）の本書が最古の武鑑というわけではない。

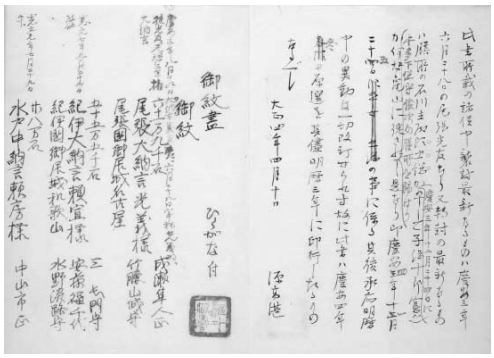
鷗外文庫の武鑑、特に江戸前中期のものの中には、本資料のように収載人物の生没年や役職などを調査してその情報が実際にはいつのものであるかを考証し、冒頭に識語として記してあるものが多い（署名の「源高湛」（みなもと　たかやす／たかしず）とは鷗外のこと）。このことから、鷗外が「「武鑑」の成立を考えて見れば、この誤謬の多いのは当然で、それはまた他書によって正すことが容易である」（同上）として実践していたことがわかる。また、これらの考証が行われた時期が大正 4 年（1915）に集中していることや鷗外の大正 3 ・ 4 年（1914・1915）の日記に武鑑の記事が散見されることは、『渋江抽斎』の連載が大正 5 年（1916）1 月13日から始まることと併せ考えると興味深い。

表紙には「武鑑　正保二年」と記された鷗外自筆の題簽が貼られ、大正 4 年（1915）4 月22日の識語によれば、「帝國大學本を借りて手寫して文庫に藏し」たものとある。残念ながら、その「帝國大學本」は大正12年（1923）の関東大震災で焼失し、現存していない。

ちなみに、細川三斎とは、安土桃山～江戸時代の武将細川忠興（1563－1645、三斎は号）のことで、かつて鷗外ともゆかりの深い豊前小倉の城主でもあった。

4－13　御紋尽（ごもんずくし）

［森鷗外自筆ヵ］　1915　1冊



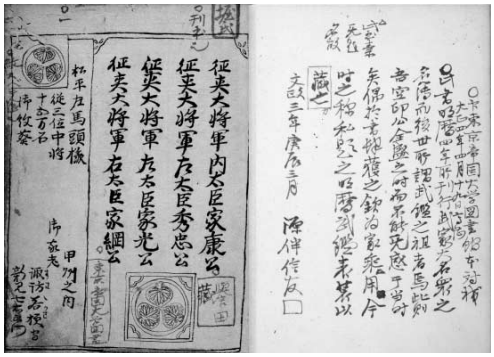
「降って慶安中の「紋尽」になると、現に上野の帝国図書館にも一冊ある。しかし可笑しい事には、外題に慶安としてあるものは、後に寛文中に作ったもので、真に慶安中に作ったものは、内容を改めずに、後の年号を附して印行したものである。」（『渋江抽斎』その四）

鷗外自筆の題簽には「武鑑　慶安四年」、原本の刊記を写した部分には「明暦三年二月吉日　西澤太兵衛板」とある。鷗外は、巻頭に記した大正4年（1915）4月10日の識語の中で、慶安4年（1651）11月25日以降明暦年間までの異動が反映されていないので、慶安4年時点の内容をそのまま明暦3年（1657）に刊行したと考証している。

原本は帝国図書館（現国立国会図書館）の所蔵で、本資料は大正4年（1915）2月に筆写されたもの。実は国立国会図書館本は明暦2年の刊本なのだが、刊記の「暦」の字の刷りがあまり良くなく、ともすると「明暦三年」に見えなくもない。「明暦二年」とあるべきところを鷗外が誤写したものか。

4－14　武鑑　明暦元年（ぶかん　めいれきがんねん）

1冊



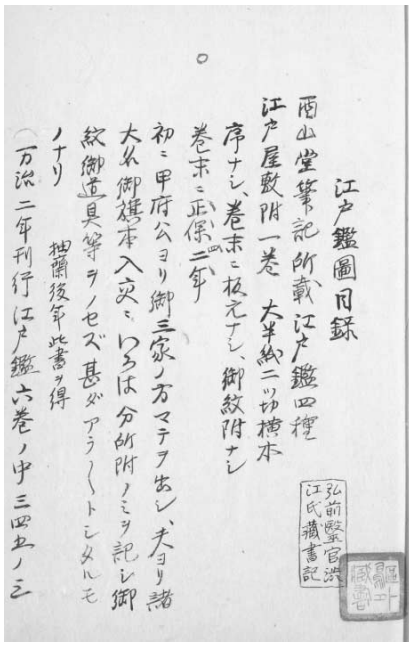
「それから明暦中の本になると、世間にちらほら残っている。大学にある「紋尽」には、伴信友の自筆の序がある。伴は文政三年にこの本を獲て、最古の「武鑑」として蔵していたのだそうである。それから寛文中の「江戸鑑」になると、世間にやや多い。」（『渋江抽斎』その四）

鷗外自筆の題簽には「武鑑　明暦元年」、原本の刊記を写した部分には「明暦四年三月吉日　松會開板」とある。鷗外の大正3年（1914）12月28日の識語によれば、明暦元年（1655）7月3日以降の記事が掲載されていないので、資料4－13同様に内容を改訂せず刊記だけを新しくして刊行したと考証する。翌4年（1915）の4月19日には東京帝国大学図書館本と対校し、朱筆で書入れを行っている。

伴信友（1773－1846）は若狭小浜藩士で江戸時代後期の国学者。対校の時に東京帝国大学図書館本にあった文政3年（1820）の信友による序（識語）も写されており、そこには「後世所謂武鑑之祖者焉」（後世武鑑といわれるもののはじめである）と記されている。この伴信友旧蔵本も資料4－12の原本同様、大正12年（1923）の関東大震災で焼失し、現存していない。

4－15　江戸鑑圖目録（えどかんずもくろく）

1915　1冊


江戸鑑圖目録
西山堂筆記所載江戸鑑四種
江戸屋敷附一巻　大半紙二ツ切横本
序ナシ、巻末ニ校元ナシ、御紋附ナシ
巻末ニ正保二年
初ニ甲府公ヨリ御三家ノ方マテヲ出シ、夫ヨリ諸
大名御摸本入交ニいろは分所附ノミヲ記シ御
紋御道具等ヲノセズ甚ダアラ〳〵トシタルモ
ノナリ　拙齋後年此書ヲ得
（一万治二年刊行江戸鑑六巻ノ中三四五ノ三
弘前醫官渋江氏藏書記

「それは上野の図書館にある『江戸鑑図目録』という写本を見て知ることが出来る。この書は古い「武鑑」類と江戸図との目録で、著者は自己の寓目した本と、買い得て蔵していた本とを挙げている。この書に正保二年の「屋敷附」を以て当時存じていた最古の「武鑑」類書だとして、巻首に載せていて、二年の二の字の傍に四と註している。著者は四年と刻してあるこの書の内容が二年の事実だということにも心附いていたものと見える。ついでだから言うが、わたくしは古い江戸図をも集めている。

然るにこの目録には著者の名が署してない。ただ文中に所々考証を記すに当って抽斎云としてあるだけである。そしてわたくしの度々見た「弘前医官渋江氏蔵書記」の朱印がこの写本にもある。」（『渋江抽斎』その四）

武鑑や江戸図を通して鷗外と抽斎を結び付けるきっかけとなった重要な資料。

鷗外自筆の題簽には「古武鑑古江戸圖目録」とあり、「上野の図書館」＝帝国図書館（現国立国会図書館）所蔵の写本を大正４年（1915）２月に書写したもの（書写者は不明）。渋江抽斎所蔵の「江戸鑑」（武鑑）と江戸図の目録であり、巻頭には「弘前醫官渋江氏藏書記」という蔵書印まで墨書されている。

これも鷗外によるものかどうかは不明だが、「正保二（四）年」の箇所（資料４－12参照）のように、利用上注意すべき年代の記述などには朱で丸印や圏点が書き入れられている。

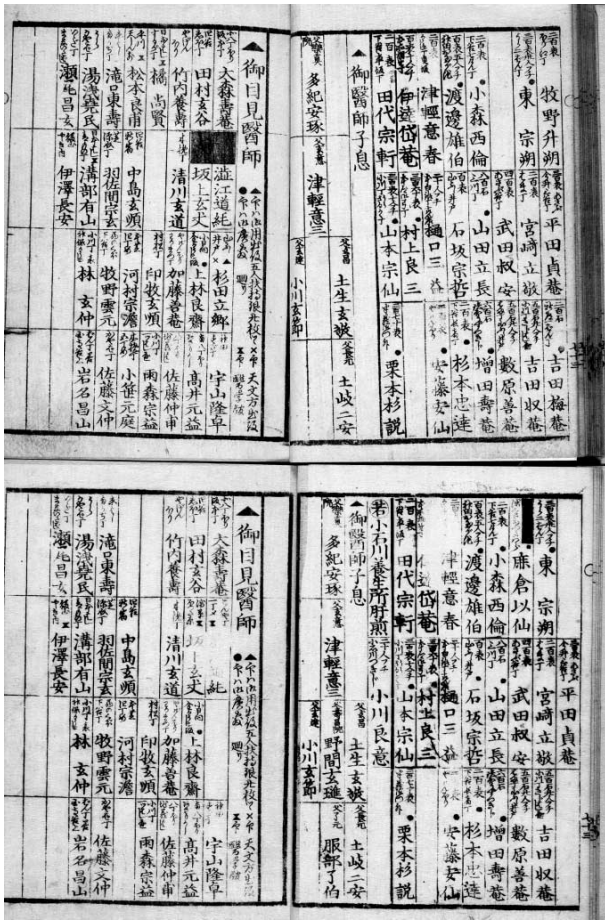
なお、鷗外文庫の中には『大學圖書館帝國圖書館武鑑目録』（鴎A10：121）、『武鑑目録』（鴎A10：211）、『帝國圖書館備附武鑑及諸家分限帳目録』（鴎A10：212）など、東京帝国大学図書館や帝国図書館所蔵の武鑑について、鷗外等により筆写された目録が含まれており、鷗外の武鑑への関心のほどがうかがわれる。

4－16　武鑑　嘉永二年（ぶかん　かえいにねん）

［江戸］　出雲寺萬次郎　嘉永２［1849］［刊］　８冊

4－17　武鑑　嘉永三年（ぶかん　かえいさんねん）

［江戸］　出雲寺萬次郎　嘉永３［1850］［刊］　10冊



「嘉永二年三月七日に、抽斎は召されて登城した。躑躅の間において、老中牧野備前守忠雅の口達があった。年来学業出精に付、ついでの節目見仰附けらるというのである。この月十五日に謁見は済んだ。始て「武鑑」に載せられる身分になったのである。

わたくしの蔵している嘉永二年の「武鑑」には、目見医師の部に渋江道純の名が載せてあって、屋敷の所が彫刻せずにある。三年の「武鑑」にはそこに紺屋町一丁目と刻してある。これはお玉が池の家が手狭なために、五百の里方山内の家を渋江邸として届け出でたものである。」（『渋江抽斎』その三十七）

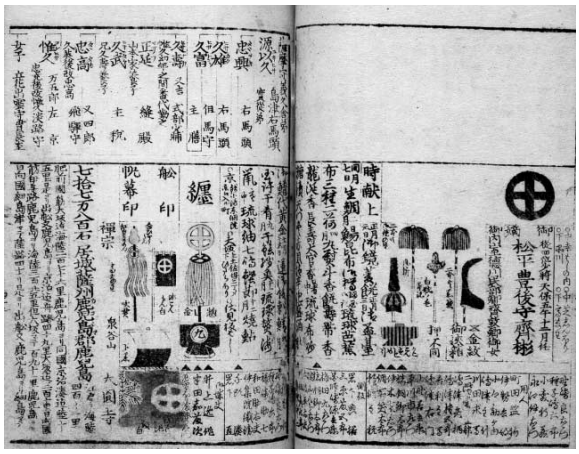
出雲寺版の嘉永２年（1849）及び３年（1850）の武鑑。武鑑収集家であった抽斎自身が将軍徳川家慶（在職1837－1853）に謁見を許され、「御目見医師」となったため掲載されたもの。

武鑑の内容は、諸大名家について記す「大名付」と幕府役人について記す「役人付」とに大きく二つに分けられる。役人付には大老・老中に始まる武家だけではなく、医師、絵師、連歌師、棋士から能役者に至るまで、また御用達商人・職人なども掲載されている。

ちなみに、「渋江道純」（嘉永３年のものは刷りが悪く見えにくい）とあるのは字で、抽斎は号、名は全善（かねよし）という。武鑑に自分の名を見たときの抽斎の感慨はいかばかりであったろうか。

4－18　武鑑　天保六年（ぶかん　てんぽうろくねん）

江府　千鐘房須原屋茂兵衛　天保６［1835］［刊］　７冊



「抽斎は大名の行列を観ることを喜んだ。そして家々の鹵簿を記憶して忘れなかった。「新武鑑」を買って、その図に着色して自ら娯んだのも、これがためである。」（『渋江抽斎』その六十四）

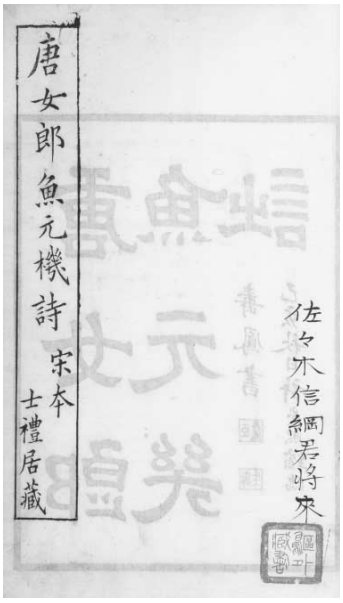
須原屋版の天保６年（1835）の武鑑。本資料は「弘前醫官渋江氏藏書記」の蔵書印が捺されていないので抽斎の旧蔵書ではないだろう。

展示箇所は薩摩藩主島津斉彬（1809－1858）の項で、江戸市中での行列（＝「鹵簿」）道具には色が付けられている。実際に大名行列を見て武鑑に書き入れや彩色を行うことについて、鷗外は趣味と捉えていたようである。しかしながら、武家間での交際や武家との交渉・取引を行うにあたって、江戸在勤の武士や商（町）人などは大名家の格付や幕府役人の異動等を知る必要があった。武鑑はこのような情報を得るために活用された実用書という性格を持っており、実際の必要上から彩色などがなされたという側面も見逃せない。

なお、天保年間のどの武鑑であるかは不明だが、鷗外の日記に初めて現れる武鑑の記述は、大正２年（1913）９月の「十四日（日）陰。（中略）妻を天保武鑑を買ひに遣る。」である。

4－19－1　唐女郎魚玄機詩（とうじょろうぎょげんきし）

［長沙］［葉徳輝］　光緒25［1899］題　１冊



歴史小説『魚玄機』（『中央公論』30年８号、大正４年（1915）７月）の資料の一つ。

「佐々木信綱君将来」と鷗外墨筆の前識語がある。佐佐木信綱宛の書簡（明治37年（1904）２月、全集書簡番号337）に「其節御寵贈之詩集今日一讀仕候」云々とあり、この前後に本書が信綱より贈られたものと推定される。同書簡には「見レバ作者ハ別品ニテ女道士兼藝者ト云フヤウナ人物ナルニソレガ又嫉妬デ別品ノ女中ヲ毆チ殺シ獄ニ下リタリトアリ實ニ芝居ニデモアリサウナ珍事ニテ面白ク存候」との感想が述べられており、これが後年『魚玄機』の構想につながったのだろう。この間、日露戦争への出征な

どもあり、成稿までに11年の歳月が流れている。

玄機の性的成長の過程に関する記述については、同時代を生きた平塚明子(らいてう)の言動の影響を、斎藤茂吉が示唆している。(梅山、一部改編)

4ー19ー2　【参考資料】森博士(もりはかせ)

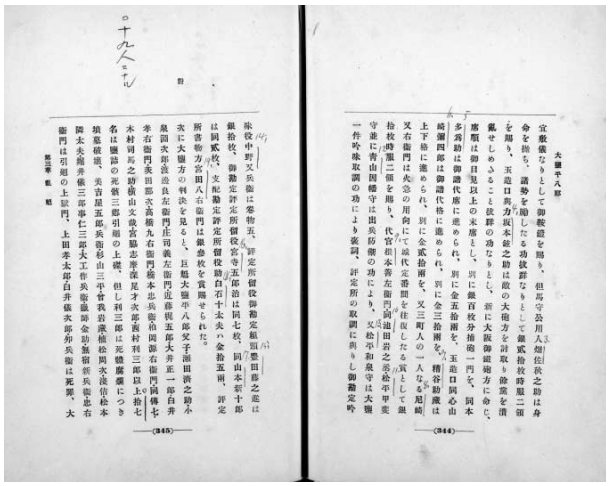
佐佐木信綱［著］
『心の花』第26巻第8號　東京　竹柏會出版部　1922

この号には、桑木巌翼ほかによる森鷗外への追悼文が掲載されている。佐佐木信綱は、鷗外との長きにわたる交流の思い出と素直な寂しさを記している。

鷗外は、明治40年(1907)から観潮楼歌会という短詩会を催しており、佐佐木信綱のほか与謝野寛(鉄幹)、伊藤左千夫、石川啄木、斎藤茂吉など多くの文人が集っていた。

4ー20　大鹽平八郎(おおしおへいはちろう)

幸田成友著　東京　東亜堂書房　1910　1冊



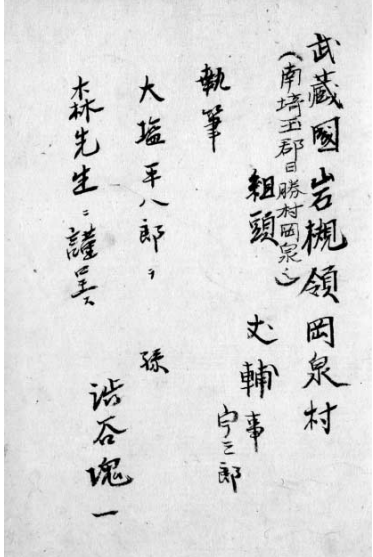
歴史小説『大塩平八郎』(『中央公論』大正3年(1914)1月)の資料であり、作品は本書に多く依拠している。

鷗外は評論『大塩平八郎』(『三田文学』大正3年1月、後に「附録」として収録)において、「大鹽に關した書籍の中で、一番多くの史料を使つて、一番精しく書いてある幸田成友君の『大鹽平八郎』を讀み、同君の新小説に出した同題の記事を讀んだ」と記している。大塩事件は天保8年(1837)2月19日に起こり、その日のうちに鎮圧された。この幸田の『大鹽平八郎』に多くを依りながら、「忠實に推測を加へて、此二月十九日と云ふ一日の間の出來事を書いた」とも記している。他に、「平八郎の思想は未だ醒覺せざる社會主義である」、「平八郎は哲學者である。併しその良知の哲學からは、頼もしい社會政策も生れず、恐ろしい社會主義も出なかつたのである」などの記述から、明治43年(1910)から翌年にかけて起こった大逆事件との関係性も示唆される。

書中、赤・青色の鉛筆や万年筆による傍線が多く引かれ、文字書入れも見られる。展示部分は、本文中「拾七」というところに黒い傍線が引かれ、その前の部分にある人物名に赤い傍線で19まで番号が振られており、上欄に「十九人ニナル」と記されている。鷗外著の該当部分には「十九人あつた」と記述されている。(出口、一部改編)

4－21　大塩平八郎（おおしおへいはちろう）

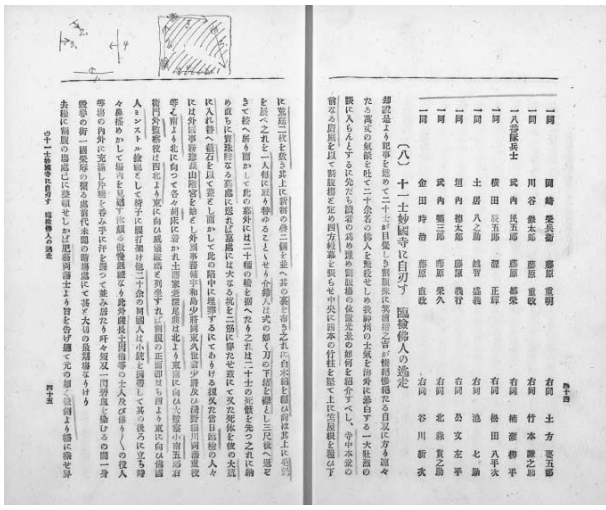
1冊



鷗外自筆の題簽には「大鹽平八郎事件」とある。展示部分の２丁表には「武藏國岩槻領岡泉村／組頭　丈輔事／宇三郎／執筆／大塩平八郎ヲ森先生ニ謹呈ス／孫／渋谷塊一」とあり、鷗外の筆で「（南埼玉郡日勝村岡泉也）」と注記がある。『大塩平八郎』執筆の際に参考とされた資料と考えられる。（出口、一部改編）

4－22　泉州堺烈舉始末（せんしゅうさかいれっきょしまつ）

佐々木甲象著　高知　箕浦清四郎、山崎惣次、土居盛義　1893　1冊



慶応４年（1868）２月15日に起こった『堺事件』の資料。「堺列擧始末」と外題が書かれ、緒言には、自刃した11士の雪冤顕彰のため、靖国神社への合祭を念願して執筆されたことが記されている。

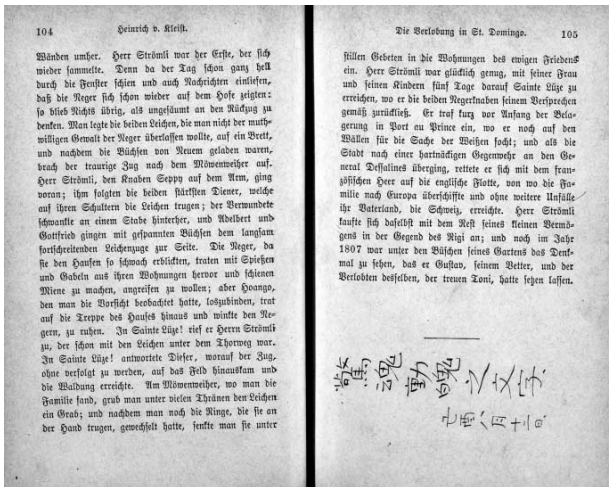
鷗外文庫蔵の幸田成友『大塩平八郎』（資料４－20）と同様に赤や青の鉛筆で多くの傍線が引かれているほか、文字、図表などもインクで書入れられており、本書を見ながら『堺事件』の執筆が進められたことが推測できる。展示部分は、妙国寺での自刃の場面の記述箇所で、赤や青の傍線のほか、上欄に臨検の役人の並び方を略図にした書き入れが２面あり、片方は消してある。

『堺事件』については、鷗外がその歴史事実の確認にあたって本書のみを使用し、他の資料と十分に比較検討などを行わなかったことが指摘されている。とくに、大岡昇平は、この作品を、歴史の「切盛と捏造」であると批判し、鷗外の「歴史其儘」の態度について再検討がなされるきっかけを作った。

鷗外は評論『大塩平八郎』を書きあげてから、『堺事件』を６日後に脱稿した。間髪を容れず、急遽執筆したことにより、『大塩平八郎』や大逆事件との関係性が示唆される。（小谷、一部改編）

4 ー23　Deutscher Novellenschatz

herausgegeben von Paul Heyse und Hermann Kurz. Munchen : Oldenbourg. 24v.



104　Heinrich v. Kleist.

Wänden umher. Herr Strömli war der Erste, der sich wieder sammelte. Denn da der Tag schon ganz hell durch die Fenster schien und auch Nachrichten einliefen, daß die Neger sich schon wieder auf dem Hofe zeigten: so blieb Nichts übrig, als ungesäumt an den Rückzug zu denken. Man legte die beiden Leichen, die man nicht der muthwilligen Gewalt der Neger überlassen wollte, auf ein Brett, und nachdem die Büchsen von Neuem geladen waren, brach der traurige Zug nach dem Möwenweiher auf. Herr Strömli, den Knaben Seppy auf dem Arm, ging voran; ihm folgten die beiden stärksten Diener, welche auf ihren Schultern die Leichen trugen; der Verwundete schwankte an einem Stabe hinterher, und Adelbert und Gottfried gingen mit gespannten Büchsen dem langsam fortschreitenden Leichenzuge zur Seite. Die Neger, da sie den Haufen so schwach erblickten, traten mit Spießen und Gabeln aus ihren Wohnungen hervor und schienen Miene zu machen, angreifen zu wollen; aber Hoango, den man die Vorsicht beobachtet hatte, loszubinden, trat auf die Treppe des Hauses hinaus und winkte den Negern, zu ruhen. In Sainte Lüze! rief er Herrn Strömli zu, der schon mit den Leichen unter dem Thorweg war. In Sainte Lüze! antwortete Dieser, worauf der Zug, ohne verfolgt zu werden, auf das Feld hinauskam und die Waldung erreichte. Am Möwenweiher, wo man die Familie fand, grub man unter vielen Thränen den Leichen ein Grab; und nachdem man noch die Ringe, die sie an der Hand trugen, gewechselt hatte, senkte man sie unter

Die Verlobung in St. Domingo.　105

stillen Gebeten in die Wohnungen des ewigen Friedens ein. Herr Strömli war glücklich genug, mit seiner Frau und seinen Kindern fünf Tage darauf Sainte Lüze zu erreichen, wo er die beiden Negerknaben seinem Versprechen gemäß zurückließ. Er traf kurz vor Anfang der Belagerung in Port au Prince ein, wo er noch auf den Wällen für die Sache der Weißen focht; und als die Stadt nach einer hartnäckigen Gegenwehr an den General Dessalines überging, rettete er sich mit dem französischen Heer auf die englische Flotte, von wo die Familie nach Europa überschiffte und ohne weitere Unfälle ihr Vaterland, die Schweiz, erreichte. Herr Strömli kaufte sich daselbst mit dem Rest seines kleinen Vermögens in der Gegend des Rigi an; und noch im Jahr 1807 war unter den Büschen seines Gartens das Denkmal zu sehen, das er Gustav, seinem Vetter, und der Verlobten desselben, der treuen Toni, hatte setzen lassen.

驚魂動魄之文字
乙酉八月十二日

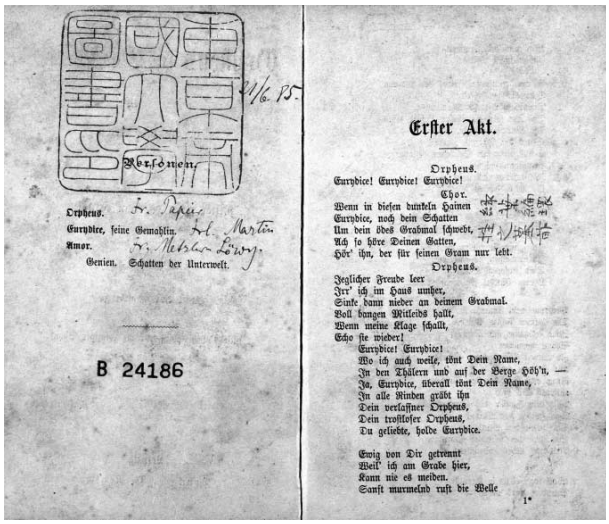
パウル・ハイゼ、ヘルマン・クルツ共編『ドイツ短編集』全24巻。総計86篇が収録されるが、31編を除いて、各編の終わりに読後感と読了日付が書入れてあり、これによって鷗外のライプチヒ時代の読書歴の多くを知ることができる。

展示部分は、後年『悪因縁』(全集第１巻)として訳されたクライスト(H. Kleist)の『サント・ドミンゴ島の婚約』(Die Verlobung in St. Domingo、本書第１巻)の文末である。「驚魂動魄之文字　乙酉八月十二日」(乙酉は明治18年(1885)にあたる)と記されている。同じく『はげあたま』(全集第３巻)として訳されたコピッシュ(A. Kopisch)の『イスキアのカーニバル』(Ein Carnevalsfest auf Ischia、本書第５巻)には、「一氣呵成、何等快筆．明治十八年四月廿三日」と識語が付されている。他、ハックレンデル(F. W. Hacklander)の『二夜』(Zwei Nachte、本書第23巻)が、『ふた夜』(全集第１巻)の翻訳原本である。

また、本書の内容は、明治20年代の鷗外の小説批評の基礎を形作っていると言えよう。たとえば、鷗外が「「文学ト自然」ヲ読ム」(全集第22巻「文学と自然と」)で提出した小説の分類概念「単稗」、「複稗」は、本書第１巻序文におけるハイゼの「ノヴェルレ」、「ロマーン」の分類を参考にしていた。この他にも、実例引用において、本書に学んだ面が少なからず存在するらしい。(山田、一部改編)

4 ―24― 1　Orpheus und Eurydice : Oper in drei Akten

Christoph Willibald Gluck. Leipzig : Reusche. 1v.



クリストフ・ヴィリバルト・グルック『オルフェウスとエウリディケ』。ライプツィヒ市立劇場での公演用に作られた特別なヴァージョンの台本で、「ライプツィヒ劇場の興行用公式版」とある。展示部分である表紙には、赤インクで、鷗外がライプツィヒ市立劇場で観劇した日の日付(1885年６月21日)と当日出演したソロ歌手の名前が記入されている。

『大正二年日記』、『大正三年日記』(全集第35巻)によれば、鷗外は大正２年(1913)７月14日に田中一良に当作品の翻訳を依頼された。その時の翻訳原本は本書であり、実際の作業は大正３年(1914)２月10日に開始され、同14日に終了した。しかし、この第一稿歌詞(『未定訳稿オルフエウス』【参考資料１】)は国民歌劇協会の使用していたピアノ・スコアと合わず、鷗外は同３月30日に相談を受けて、修正を行った。この第二訳稿(『Orpheus(沙羅の木)』【参考資料２】)の成立は同８月27日である。これらの事情は、『オルフエウス(附記)』(大正３年(1914)10月、全集第19巻)に記されている。(河野・山田、一部改編)

4 ―24― 2　【参考資料１】オルフエウス(第一稿)[未定訳稿]

森林太郎著　鷗外全集　著作篇第19巻　東京　岩波書店　1938

資料４－24－１の展示箇所に該当する冒頭部分。
鷗外は原本のこの部分に「緑葉編環／挂之墓前」と書き入れている。

４－24－３　【参考資料２】Orpheus［第二訳稿］（沙羅の木）

森林太郎著　木下杢太郎［ほか］編　鷗外全集　第19巻　東京　岩波書店　1973

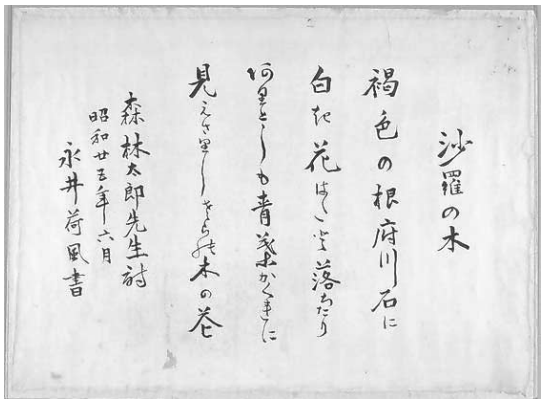
資料４－24－１の展示箇所に対応する冒頭部分。

鷗外は『オルフエウス(附記)』に「第二稿では、私は韻語としての句に拘泥せずに、縦に續けて書き流すことにした。これは謡ひものとして、句ごとに行を改める必要がないからである」と記している。

当初、グルックの生誕200年にあたる大正３年(1914)７月に上演する計画であったが、同附記には「然るに六月の末にはオオストリアの皇儲がサラエヲで刺客のために命を殞し、それが導火になつて、(中略)遂にヨオロツパの大戰を惹き起した。切角の記念日は、オオストリアがどうするだらうと云ふ人心恟々の間に經過してしまつたのである。記念演奏などもどうなつたやら、私は精しい事を聞かずにしまつた」とある。

なお、文字どおり幻の舞台となってしまった本作品が実際に上演されたのは今世紀に入ってからで、鷗外の翻訳から90年余を経た平成17年(2005)９月に東京芸術大学奏楽堂で行われたのが初演である。

４－24－４　【参考資料３】沙羅の木



永井荷風書「沙羅の木」碑文原稿
（文京区立森鷗外記念館蔵）

沙羅の木
褐色の根府川石に
白き花はたと落ちたり
ありとしも青葉がくれに
見えざりしさらの木の花

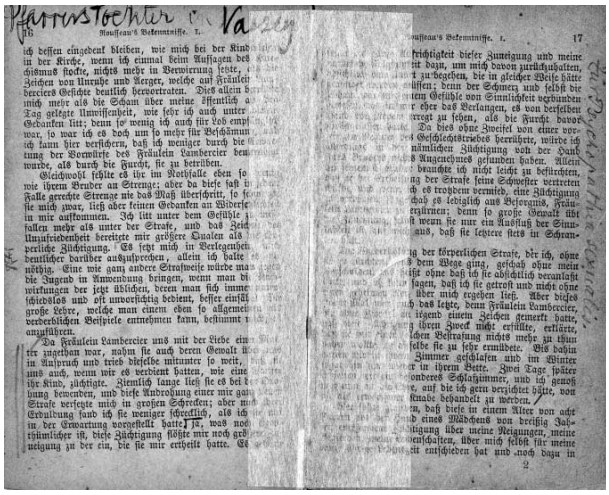
『Orpheus［第二訳稿］』は、後に詩集『沙羅の木』に収められた。鷗外はその序に「「沙羅の木」は譯詩、沙羅の木、我百首の三部から成り立つてゐる。此三部は偶然寄り集まつたもので、其間に何等の交渉もない。(中略)うたひものは二つ収めてある。長くて前にあるのはグルツクのオペラで、これは從來日本人の手で興行せられたことのある唯一の樂劇である。私はこれを書く時、始て『逐音譯』を試みた」と記している。

なお、書名にもなっている詩『沙羅の木』を刻した詩壁が文京区千駄木１丁目の観潮楼跡にある。永井荷風の揮毫によるもので、鷗外の三十三回忌に当たる昭和29年(1954)７月９日に供養として建てられた。鷗外の子・於菟は「この時より二年前、私が東武線〔原文のまま〕市川駅の近くに隠棲して居られる永井荷風さんを訪ねて執筆をお願いしたところ、世俗をきらうというので名高い荷風氏は一言の下に快諾され…」(『父親としての森鷗外』p.333)と記している。

また、娘・杏奴の回想によれば、鷗外を「先生」と畏敬し続けた荷風の死の床には『渋江抽斎』が開かれたままになっていたという。

4 ―25― 1　Rousseau’s Bekenntnisse

uebersetzt von H. Denhardt Leipzig　Reclam. 2v.



ルソー『告白』。同書の翻訳『懺悔記』を制作する際に底本として使われた。明治21年(1888)の時点で、全訳出の計画があったというが、実際は要約や省略を含む抄訳となった。本書第１巻の21ページから第２巻の27ページまで346ページ分が省略されている。

女性に対する露出によって快感を得ていた事を述べた箇所(本書第２巻)の欄外に「Exhibitioner」(露出者の意か)、展示部分の、寄宿先の牧師の娘(ラムベルシエエ嬢)に受けた折檻によって官能に目覚めた事を述べた箇所(本書第１巻)には墨書きで大きく「Pfarrers Tochter in Vassey」(ボセーの牧師の娘、の意か)とあり、左欄外には青字で「褻」とある。

鷗外のルソーへの言及には、他に『ルーソーガ少時ノ病ヲ診ス』、石川戯庵による全訳書『懺悔録』(大日本図書　1912)の序文『「ルッソォ懺悔録」序』があり、本書への書入れの多さも相まって、関心の深さが窺える。『ルーソーガ少時ノ病ヲ診ス』では、クラフト・エービング(R. von Krafft–Ebing)の著書『変態性欲心理』(Psychopathia sexualis、鷗外は『華癲論』または『房惟心疾』と訳す)に上記のようなルソーの症例が記されていない事に疑問を呈している。展示部分の右欄外には「Zur Psychopathia sexualis」(変態性欲心理と比較せよ、の意か)と、対応する鉛筆書きの書入れがある。また、そこで引用された訳文は『懺悔記』の文章とは異なっており、『懺悔記』訳出にあたって鷗外が新たに訳文を作成し直した事がわかる。(河野・山田、一部改編)

4 ―25― 2　【参考資料】懺悔記

森林太郎著　木下杢太郎［ほか］編　鷗外全集　第２巻　東京　岩波書店　1971

資料４－25－１展示箇所に該当するページ(p.79－84)の一部。

参考文献

1．若き鷗外

・中井義幸編．鷗外印譜．青裳堂出版，1988，183p,（日本書誌学大系，58）．
・小堀桂一郎．若き日の森鷗外．東京大学出版会，1969，722p.
・平川祐弘・平岡敏夫・竹盛天雄編．鷗外の人と周辺．新曜社，1997，478p.（講座森鷗外，第１巻）．
・山根弘子．森鷗外青年期の漢文学受容⑵：「鷗外文庫」調査をめぐり．近代文学注釈と批評．1995，２号，p.１－18.
・山根弘子．森鷗外自筆抄本翻刻：「茶事雑抄　一名須貴屋廼塵」１．近代文学注釈と批評．2003，５号，p.128－136.
・森弘子．森鷗外自筆抄本翻刻：「茶事雑抄　一名須貴屋廼塵」２．近代文学注釈と批評．2007，６号，p.97－101.
・合山林太郎〈資料紹介〉青少年期の森鷗外と近世日本漢文学―鷗外文庫の蔵書調査から得た知見を中心に―文学，2007，８巻２号，p.148－155
・前田愛．明治の読書生活．言語生活．1969，211，p.15－23.
・前田愛．鷗外の中国小説趣味．言語と文芸．1965，38，p.48－55.
・中村文雄．官僚鷗外の側面．鷗外．1993，52，p.27－60.
・美留町義雄．“都市の衛生”．鷗外のベルリン．水声社．2010，p.67－114.
・デジタル大辞泉．「経国美談」の項．JapanKnowledge.（参照 2012－08－24）
・デジタル国史大辞典．「大和本草」の項．JapanKnowledge.（参照 2012－08－24）

2．家族と友人

・森於菟．父親としての森鷗外．筑摩書房，1969，p.103－104.
・文沢隆一．鷗外をめぐる女たち．林道舎，1992，p.215.
・内田魯庵．新編思い出す人々．岩波書店，1994，p.338.
・森於菟．父親としての森鷗外．筑摩書房，1964，p.274.
・合山林太郎，出口智之．未翻刻森鷗外書翰紹介：東京大学総合図書館鷗外文庫蔵『宗旨雑記』より．鷗外．2009，85号，p.１－18
・岡崎義恵．森鷗外と夏目漱石．法文館，1973，p.６－８
・齋藤茂吉．“観潮楼断片記”．齋藤茂吉全集．第７巻．岩波書店，1975，p.393－403
・柴生田稔．“第９巻について”．齋藤茂吉全集月報12（第９巻）．岩波書店，1973，p.10－12
・品田悦一．齋藤茂吉：あかあかと一本の道とほりたり．ミネルヴァ書房，2010，345p,（ミネルヴァ日本評伝選）．
・二瓶愛蔵．若き日の露伴．明善堂書店，1978，445p.
・森潤三郎．鷗外森林太郎．丸井書店，1942，364p.
・森鷗外．“鷗外漁史とは誰ぞ”．鷗外全集．第23巻．岩波書店，1951，p.142.
・山崎國紀．評伝森鷗外．大修館書店，2007，849p.
・日本近代文学館編．日本近代文学大事典．講談社，1977－1978，６冊．
・河盛好蔵．仏文学問わず語り―11―辰野隆先生と「信天翁の眼玉」．文學界．1993，47⑼，p.206－214.
・辰野隆．“鷗外先生”．忘れ得ぬ人々．福武書店，1983，p.151－153,（辰野隆随想全集；１）
・三木露風．“我が歩める道”．三木露風全集．第２集．三木露風全集刊行会，1973，p.157－301.
・木下杢太郎．“森鷗外”．木下杢太郎全集．第15巻．岩波書店，1982，p.22－71.

3．知識の沃野

・木下杢太郎．“森鷗外”．岩波講座日本文学．第10巻．岩波書店,1932，38p.
・中井義幸．“テエベス百門の大都”．森鷗外　ライフステージとしての文京．文京区ふるさと歴史館編．文京区教育委員会,1993，p.６－９.
・山崎國紀．評伝森鷗外．大修館書店,2007，849p.
・大塚美保．“『生田川』―鷗外と唯識思想―”．鷗外を読み拓く．朝文社，2002，p.97－132.
・小川宏．「唯識鈔」と「華厳五教章」について．図書館の窓：東京大学附属図書館月報.1974，Vol.13，no.４，p.34－36.
・加納喜光．『毛詩草木鳥獣虫魚疏』―詩経名物学の祖．月刊しにか.1996，Vol.７，No.12，p.18－23.
・小堀桂一郎．若き日の森鷗外．東京大学出版会，1969,722p.
・“Eindrüke”．鷗外全集．第38巻．岩波書店，1975，p.88－93.

・“南都小記”．鷗外全集．第20巻．岩波書店，1973，p.[699]－731.
・“金銀銅價考”．鷗外全集．第20巻．岩波書店，1973，p.747－[796].
・滝本誠一，向井鹿松編纂．日本産業資料大系．第８巻．中外商業新報社，1927，789p.
・吉田亀寿．織物組織篇．大日本織物協会，1897,616p.
・“後記”．鷗外全集．第37巻．岩波書店,1975，p.581－584.

４．作品の原点

・山崎一穎．森鷗外・史伝小説研究．桜楓社，1982，310p.
・松木明知編．森鷗外「渋江抽斎」基礎資料．第八十六回日本医史学会，1988，444p.
・一戸務．“鷗外作『渋江抽斎』の資料”．文学．1933，１巻５号，p.808－820.
・小泉浩一郎．“『渋江抽斎論』―出典と作品―”．言語と文芸．1966，47，p.49－62.
・梅沢静香．“『伊澤文書』(一)”．近代文学注釈と批評．2000，４号，p.134－150.
・リハチョフ，アレクセイ．“『伊澤文書』(二)”．近代文学注釈と批評．2000，４号，p.151－156.
・安達原達晴．“『伊澤文書』(三)”．近代文学注釈と批評．2003，５号，p.138－151.
・富士川英郎ほか編．詩集日本漢詩，第９巻．汲古書院，1985，491p.
・森鷗外．鷗外歴史文学集，第５巻．岩波書店，2000，477p．小泉浩一郎注釈
・“武鑑書入”．鷗外全集．第20巻，岩波書店，1973，p.[733]－746.
・彌吉光長．書誌と図書評論．日外アソシエーツ，1982，258p.,(彌吉光長著作集，５).
・秋山一実“武鑑について：その定義と範囲”．神道古典研究　会報．1984，５号，p.126－148.
・藤實久美子．武鑑出版と近世社会．東洋書林，1999，325p.
・藤實久美子．江戸の武家名鑑：武鑑と出版競争．吉川弘文館，2008，232p.,(歴史文化ライブラリー,257).
・森鷗外：近代文学界の傑人．平凡社，2012，159p.,(別冊太陽，日本のこころ193).
・森林太郎．沙羅の木　詩集．阿蘭陀書房，1915，234p.
・尾形仂．森鷗外の歴史小説　史料と方法．筑摩書房，1979，273p.
・齋藤茂吉．鷗外の歴史小説．岩波書店，1975，1022p.,(斎藤茂吉全集，第24巻).
・小堀桂一郎．森鷗外―文業解題，創作編．岩波書店，1982，462p.
・小堀桂一郎．森鷗外―文業解題，翻訳編．岩波書店，1982，551p.
・小堀桂一郎．“翻訳原本の鷗外自筆書き入れについて１～３”．鷗外全集．月報１～３，岩波書店，1971－1972.
・山崎一穎．“鷗外・『堺事件』試論”．跡見学園女子大学紀要，1975，８号，p.43－56.
・藤田覚．“解題”．鷗外歴史文学集．第２巻，岩波書店，2000，p.443－467.
・瀧井敬子．漱石が聴いたベートーヴェン．中央公論新社，2004，228p.,(中公新書，1735).
・森於菟．父親としての森鷗外．筑摩書房，1969，351p.,(筑摩叢書，159).
・小堀杏奴，大岡昇平．“文豪鷗外の肖像”．対談日本の文学．中央公論社，1971，p.25－31.

展示資料一覧

電子欄に“＊”がついている資料は以下の URL「鷗外文庫書入本画像データベース」で全文または書入れ部分を閲覧できる。
http://rarebook.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/ogai/index.html

資料番号	電子	タ　イ　ト　ル	請求記号	備　考
1―1	＊	安政箇勞痢流行記	貴重書 鴎A00：6578	
1―2	＊	烏琴齋雜録	鴎A90：267	書庫 コレクション室
1―3	＊	小説神髄	鴎E20：32	書庫 コレクション室
1―4	＊	昔話稲妻表紙　5巻	鴎E24：249	書庫 コレクション室
1―5―1	＊	頼豪阿闍梨恠異傳引用群書要語	鴎E24：253	書庫 コレクション室
1―5―2		頼豪阿闍梨恠異傳	鴎E24：243	書庫
1―6	＊	唐宋八家文読本	鴎E44：420	書庫 コレクション室
1―7―1	＊	隔靴論	鴎E44：484	書庫 コレクション室
1―7―2		隔靴論	E44：532	書庫 参考資料
1―8	＊	皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅　100回坿讀法	鴎E46：139	書庫 コレクション室
1―9	＊	經國美談：齋武名士	鴎E91：5	書庫 コレクション室
1―10	＊	大倭本草	鴎T81：45	書庫 コレクション室
1―11	＊	軍事雜記	鴎W30：51	書庫 コレクション室
1―12	＊	茶事雜抄　一名すきやの塵	鴎YB20：76	書庫 コレクション室
1―13		Vorarbeiten zu einer zukünftigen Wasser-Versorgung der Stadt Berlin	鴎BV000：43	書庫
1―14	＊	Geschichte der Philosophie im Umriβ : ein Leitfaden zur Übersicht	貴重書 鴎A100：1073	
1―15	＊	Poetik : die Dichtkunst und ihre Technik, vom Standpunkte der Neuzeit	貴重書 鴎A100：1667	
1―16	＊	Martin Luther's Leben	鴎C400：217	書庫 コレクション室
2―1	＊	語格指掌圖	鴎SD：1	書庫 コレクション室
2―2	＊	宗旨雜記	貴重書 鴎A00：6455	
2―3	＊	菅頼系諸家事蹟	鴎H20：468	書庫 コレクション室
2―4		幻影の盾；倫敦塔；一夜；カーライル博物館；二百十日	鴎E25：124	書庫 コレクション室
2―5		椀久物語；不安；當流人名辭書	鴎E39：62	書庫 コレクション室
2―6		短歌私鈔	貴重書 鴎A00：6581	
2―7		一握の砂	貴重書 鴎A00：6571	
2―8		青海波	貴重書 鴎A00：6569	
2―9		雲母集：歌集	貴重書 鴎A00：6572	
2―10		信天翁の眼玉	貴重書 鴎A00：6576	
2―11		白き手の獵人：詩集	貴重書 鴎A00：6573	
2―12		南蛮寺門前	鴎E28：629	書庫
3―1	＊	唯識鈔	貴重書 鴎A00：6510	
3―2	＊	冠註傍解注心經	鴎C40：776	書庫 コレクション室
3―3	＊	陸氏草木鳥獸蟲魚疏圖解	鴎B60：1193	書庫 コレクション室
3―4	＊	Handbuch der Arzneimittellehre	鴎V150：43	書庫 コレクション室
3―5	＊	System der Rechtsphilosophie	鴎L510：9	書庫 コレクション室
3―6	＊	長禄江戸圖	鴎J81：82	書庫 コレクション室
3―7	＊	奈良小記	鴎G25：67	書庫 コレクション室
3―8	＊	金銀銅價考	鴎N50：79	書庫 コレクション室
3―9	＊	樂小記	鴎F20：64	書庫 コレクション室
3―10	＊	織紝小記	鴎XB20：23	書庫 コレクション室
3―11	＊	膳部之事	鴎YA：50	書庫 コレクション室
3―12	＊	漢字整理案	鴎D30：220	書庫 コレクション室
3―13	＊	塵冢	鴎A90：443	書庫 コレクション室
4―1	＊	澀江家乗	貴重書 鴎A00：6575	
4―2	＊	抽齋年譜	鴎H20：511	書庫 コレクション室
4―3	＊	抽齋の親戚、并に門人	鴎H20：555	書庫 コレクション室
4―4	＊	抽齋歿後	鴎H20：514	書庫 コレクション室
4―5	＊	伊澤文書	鴎H20：446	書庫 コレクション室
4―6	＊	池田京水文書	鴎H20：444	書庫 コレクション室
4―7	＊	北條文書	鴎H20：456	書庫 コレクション室
4―8	＊	霞亭小著鈔	鴎H20：496	書庫 コレクション室
4―9		武鑑　文化十二年	鴎H20：1071	書庫 コレクション室
4―10		治代普顯記　六十餘州知行高一萬石以上	鴎H20：865	書庫 コレクション室
4―11		武鑑の研究（一）	鴎A10：218	書庫 コレクション室
4―12		正保四年改御大名並御旗本記	鴎H20：866	書庫 コレクション室
4―13		御紋尽	鴎H20：867	書庫 コレクション室
4―14		武鑑　明暦元年	鴎H20：868	書庫 コレクション室
4―15	＊	江戸鑑圖目録	鴎A10：209	書庫 コレクション室
4―16		武鑑　嘉永二年	鴎H20：1152	書庫 コレクション室
4―17		武鑑　嘉永三年	鴎H20：1155	書庫 コレクション室
4―18		武鑑　天保六年	鴎H20：1112	書庫 コレクション室
4―19―1	＊	唐女郎魚玄機詩	鴎E45：991	書庫 コレクション室
4―19―2		森博士	ZE：5	書庫 参考資料
4―20	＊	大鹽平八郎	鴎H20：334	書庫 コレクション室
4―21	＊	大塩平八郎	鴎G27：184	書庫 コレクション室
4―22	＊	泉州堺烈擧始末	鴎G29：142	書庫 コレクション室
4―23	＊	Deutscher Novellenschatz	鴎E400：313：1～24	書庫 コレクション室
4―24―1	＊	Orpheus und Eurydice : Oper in drei Akten	鴎F100：624	書庫 コレクション室
4―24―2		オルフエウス（第一稿）［未定訳稿］	A30：471：19	書庫 参考資料
4―24―3		Orpheus［第二訳稿］（沙羅の木）	918.68：Mo45：19	開架 参考資料
4―24―4		沙羅の木		参考資料 パネル展示
4―25―1	＊	Rousseau's Bekenntnisse	鴎H400：258	書庫 コレクション室
4―25―2		懺悔記	918.68：Mo45：2	開架 参考資料
参考出品		鷗外像（軍医総監）		石塚公昭作（個人藏）

平成24年度附属図書館所蔵資料展示委員会　委員名簿

委員長　北村　照夫（附属図書館情報サービス課長）
吉田左貴子（附属図書館情報管理課専門員）
大澤　正男（附属図書館情報サービス課専門員）
三浦　圭子（附属図書館情報サービス課専門員）
鈴木　剛紀（附属図書館総務課企画渉外係主任）
山崎　裕子（附属図書館情報管理課専門職員）
中谷実邦子（附属図書館情報サービス課相互利用係長）
石川　一樹（東洋文化研究所図書チーム主査）
内村奈緒美（大学院理学系研究科・理学部物理学図書室係長）
内藤裕美子（大学院法学政治学研究科・法学部研究室図書受入係主任）
小林　幸志（経済学図書館図書受入係主任）
岩井　雅史（附属図書館情報サービス課参考調査係主任）

展示指導　出口　智之（東海大学文学部講師）

鷗外文庫書入本画像データベース作成スタッフ

（五十音順）「＊」は解説執筆者

梅山聡（＊）、大場伊都子、甲斐克子、神田祥子（＊）、河野至恩（＊）、合山林太郎（＊）、小谷瑛輔（＊）、渋谷百合絵（＊）、多田蔵人（＊）、田中静香、出口智之（＊）、西克代、目黒文乃（＊）、森加奈子、山田恵子（＊）

展示協力　石塚公昭

この展示はインターネットでもご覧になれます。
（http://www.lib.u-tokyo.ac.jp/tenjikai/tenjikai2012/index.html）

鷗外の書斎から
―生誕150年記念　森鷗外旧蔵書展―

主催　東京大学附属図書館

平成24年10月18日発行
編集　東京大学附属図書館所蔵資料展示委員会
発行　東京大学附属図書館
〒113-0033　東京都文京区本郷 7-3-1
電話03-5841-2640（情報サービス課）

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

会期・会場：平成24年10月18日（木）ー11月16日（金）　※10月25日（木）・11月15日（木）は休館　　東京大学総合図書館3階ロビー